

解題

弊帚詩話
附錄二卷
一卷

西島長孫著

西島長孫字は元齡、良佐と稱し、蘭溪と號す、江戸の人、本姓は下條、長孫始め西島柳谷に従ふて學ぶ、柳谷其才を愛し、養ふて子とせり、學極めて博く、最も詩に長ぜり、昌平學の教官たり、嘉永五年十二月十五日歿す、年七十三、此書一に汝々齋詩話と名く、今汝々齋詩話と題署せる本と、此の書とを對校するに、汝々齋本は此書より多きこと十六條なり、今此書中に〔補〕と書せるものこれなり、又た石徹士之後、藍田東龜年心賦云の二條を下卷の初めに載す、其の他は順序に相違あることなし、されど字句の間には、往々増減あり、今一々原文の下に其の異同を録し、廓弧を施して以て原注に別てり、汝々齋本には附録を載せず、且つ跋語も頗る異同あり、唯兩本その孰れか先、孰れか後なるを知らざるなり、二本竝に寫本にて世に傳はり居り、未だ刻本あるを見ず。

弊蒂詩話上卷

江都 西島長孫元齡著

丈山先生、姓石川、名凹(夜々齋詩話作)、丈山其字也、初名重之、稱嘉右衛門、三河泉莊人、年四歲能走六七里、父信定奇之曰、此兒必名天下、後從神祖征伐、丈山素有文雅之志、其在駿府(無其在駿府四字)、從學于清見寺僧說心、(從學上)大坂之役、會病、其母貽書責以立勳、(有竊字)、丈山強病特至、玉造獲佐佐某、東遷某業云、名十左衛門、曰、如是足以報母也、城陷、有司以爲重之爲行人、(作司)妄爲先登、請逐之、遂爲僧居妙心寺、羅山林子見諸惺窩先生、先生爲說聖人立

丈山先生、姓は石川、名は凹、丈山は其字なり、初の名は重之、嘉右衛門と稱す、三河泉莊の人、年四歲能く六七里を走る、父信定之れを奇として曰、此子必天下に名あらんと、後神祖に從つて征伐す、丈山素と文雅の志あり、其駿府に在る清見寺の僧說心に從學す、大坂の役會病む、其母書を貽り、責るに勸を立つるを以てす、丈山病を強めて特に玉造に至り、佐々某、東遷某業に云ふ、を獲たり、曰是の如くならば以て母に報するに足ると、城陷る、有司以爲ふ重之、行人と爲り、妄に先登を爲す、請ふ之れを逐はんと、遂に僧と爲りて妙心寺に居る、羅山林子諸を惺窩先生に見えしむ、先生爲に聖人、道を立つるの原を説く、是に於て髮を蓄へ俗に還る、然れども終身復妻なし、後家貧く母老ゆるが爲に、出でて紀侯に今の藝、仕ふ、久ふして母歿す、亡して叡山に歸り、一乘寺村に匿れ、自ら

道之原、於是蓄髮還俗、然終身無復妻、(妻入稱爲似元)後爲家貧母老、出仕紀侯、(今藝侯久登山語)

之母歿、亡歸叡山、匿一乘寺村、自號曰四明

山人、或曰大拙、以詩賦自娛、咏蟬、小河之爾

歌、(國歌作)終身不入京師、(京師下有天朝、特徵不至六字)

請狩野探幽齋、畫唐土詩人三十六員、揭諸

壁上、蓋倣本邦所謂三十六歌仙也、因名其

堂曰詩仙、卒年九十、實寬文十二年也、(丈山出處、

詳見井太室國史備林傳、三橋氏詩仙堂志、今節錄于此、丈山幼長于戈之

間、風月之樂、不忘于心、(長于戈、至不忘于心、十三字、作長鞍馬間、

嘲風吟月之)至從大坂之役、猶不廢吟哦、鳩

巢文集有橫槩遺物記、乃丈山所佩墨斗也、

在叱咤戰爭之中、(叱咤作)苟有所得、片言

隻語、又從記之、橫槩之名、良不誣矣、然其詩

號して四明山人と曰ひ、或は大拙と曰ふ、詩賦を以て自ら娛しむ、蟬の小河の國歌を咏し、終身京師に入らず、狩野探幽齋に請ひ、唐土の詩人三十六員を畫き、諸を壁上に掲ぐ、蓋本邦の謂はゆる三十六歌仙に倣ふなり、因て其堂を名けて詩仙と曰ふ、卒する年九十、實に寬文十二年なり、(丈山の出處詳に井太室國史備林傳、三橋氏の詩仙堂志に見ゆ、今此に節錄す、丈山幼にして千戈の間に長じ、風月の樂、心に忘れず、大坂の役に從ふに至りて、猶吟哦を廢せず、鳩巢文集に橫槩遺物記あり、乃丈山佩ぶる所の墨斗なり、叱咤戰爭の中に在りて、苟得る所あれば、片言隻語、又從つて之れを記す、橫槩の名、良に誣ひず、然れども其詩往々和人の習氣を免れず、亦時運の使むる所なり、絕句は八句に勝り、五言は七言に勝る、今其佳なる者を摘す、五言に「窻間殘月の影、風際連鐘の聲、」水は減して灘聲穩、秋深して月色寒し、高樹秋容早く、密林霜氣遲し、孤燈殘夜に淡たり、群鳥空林に聒し、曾て弄す鬼閣冊、寧ぞ希はん麟閣圖、蓬山兩有るが如し、高樹枝なきに似たり、(單)斷雲嶺、影を分ち、返照水、光を生ず、溪空しく鶯韻緩く、山は盡く馬蹄の前、春雨三月に連なり、風花空しく一年、半壁殘燈の影、孤牀落葉の聲、背を炙りて爐火に臥し、臍を撐えて道書を讀む、

往往不免和人習氣亦時運之所使也（詩以其下至所使也十八字作天正以還文致否寒詩遊墮地特武田信玄有詩賦之名其餘一二武將或詩選文山先不足錄所謂以文山爲題楚也謂紹代往不免和習亦）絕句勝八句五言勝七言今摘其佳者五言窻間殘月影風際遠鐘聲水減灘聲穩秋深月色寒高樹秋容早密林霜氣遲孤燈淡殘夜群鳥聒空林曾弄兔園冊寧希鱗圖遠山如有雨高樹似無枝（早行）斷雲嶺分影返照水生光溪空鶯韻緩山盡馬蹄前春雨連三月風花空一年半壁殘燈影孤牀草葉聲炙背臥爐火撐牀讀道書歸鴉天有路遊蝶圍無風七言謝家子弟雙蘭砌杜叟乾坤一草堂吳江秋盡水空去天姥霜遲葉初翻（登高）去年尋藥台溪道昨日寄梅江

「歸獨天に路あり遊蝶圍に風なし七言に謝家の子弟雙蘭砌杜叟の乾坤一草堂吳江秋盡て水空しく去り天姥霜遅くして葉初めて翻る（高維に）去年藥を尋ぬ台溪の道昨日梅を寄す江左の風絶句漫成に杖屨相従ふ兩侍童酒瓢茗椀殘紅に對す狂吟隨意村落を過ぎ艸色無邊楊柳の風小圃口占に冬愛春に似たり微暖の時知らず何の處か梅の披く有る閑園雨過ぎて紅葉少く秀色纏に残る一兩枝雨に阻られ牧方に宿す浩々たる洪河東より流れ西海に朝宗して長空に接す水邨山郭知んぬ多少ぞ春色朦朧烟雨の中豊國神廟の壁に題す零落東山の古廟廊蒼苔蔓艸積垣に上る英靈飛散して巫祝無し秋月春風主張を作す皆隱者の語なり又戲謔願を解く者あり戲に團扇に題す團々素質別に天を移す手に隨ひ涼を生じ更に凜然昔日謫仙何ぞ實はざる清風明月兩三錢羅德山前に赴きて牡丹を見んと欲し浞城に到りて雨に阻てらる聞説く南山牡丹多しと吟輿郭を出て春殘を惜む花魂自ら秋豔に羞るに似たり雨と爲り雪と爲りて看るを許さず雷驚胸に乾坤を統て眞を葆するに似たり風花を友と爲し道を鄰と爲す讀海看盡す數千歳自是れ神仙不死の人奈丈山先生

左風絕句漫成杖屨相從兩侍童酒瓢茗盃
 對殘紅狂吟隨意過村落艸色無邊楊柳風
 小園口占（古下有云）冬愛似春微暖時不知
 何處有梅披閑園雨過少紅葉秀色纔殘一
 兩枝阻雨宿牧方浩浩洪河流自東朝宗西
 海接長空水邨山郭知多少春色朦朧烟雨
 中題豐國神廟壁零落東山古廟廊蒼苔蔓
 艸上頽垣英靈飛散無巫祝秋月春風作主
 張皆隱者之語也又有戲譴解頤者戲題團
 扇團團素質別移天隨手生涼更颯然昔日
 謫仙何不買清風明月兩三錢欲赴雄德山
 前見牡丹到浣城阻雨聞說南山多牡丹吟
 輿出郭惜春殘花魂自似羞秋豔爲雨爲雲
 不許看寓意胸統乾坤似葆真風花爲友道

を最慕する久し故に其頰を獻はずして備に此に擧ぐ。

爲鄰、讀書看盡數千載、自是神仙不死人、余
景慕丈山先生久矣、(余景慕句作余祖丈山先生特爲已甚愛慕之情不
可以)故不厭其煩、備舉于此。

世有四家絕句、藤惺窩石丈山(石下有)釋元
政、釋元次、爲之四家、蓋元政爲其冠、丈山次
焉、元政名曰政、彥藩仕族、薙髮爲日徒、實爲
法華律之鼻祖、(祖下有云字)居深草里、時人以爲
活佛、稱不可思議、又號霞谷山人、妙子、艸山
集十五卷、行于世、父先歿、獨事母、篤孝、天至、
詩中及母者、凡五十餘篇、閑居詩序云、余得
幽居霞谷之側、而色養父母、有年、父喪而母
尙存焉、奉事于今十年矣、母之居、距我蘭若數
十弓、竹籬茅舍、(舍作居)恬然而安焉、頃患微
恙、余侍湯藥已度旬矣、亦可見至誠之一端

繫器詩話上卷

世に四家絶句あり、藤惺窩石丈山、釋元政、釋元次、之れを
四家と爲す、蓋元政其冠たり、丈山焉に次ぐ、元政名は日
政、彥藩の仕族、髮を薙て日徒と爲る、實に法華律の鼻祖
たり、深草の里に居る、時人、以て活佛と爲し、思議す可か
らずと稱す、又霞谷山人、妙子と號す、草山集十五卷、世に
行はる、父先づ歿す、獨、母に事ふ、篤孝、天至、詩中、母に及ぶ
者、凡五十餘篇、閑居詩の序に云ふ、余霞谷の側に幽居す
るを得、而して父母に色養する年あり、父喪して、母尙存
す、奉事する、今に十年なり、母の居、我蘭若を距る、數十弓、
竹籬茅舍、恬然として安す、頃微恙を患ふ、余湯藥に侍し
て、已に旬に度ると、亦至誠の一端を見るべきなり、當時明
人陳元贊あり、投化す、京攝の間に遊ぶ、元政之れと交を
定め、互に師友を相爲す、元々唱和集二卷あり、元政の元贊
に送る詩に
云ふ、君能く和語を言ふ、郷音舌尙在り、久しく辨れて、十に九を
知る、傍人猶未だ解せず、然らば、則て交接の久しき、陳和語を解す、
以て兩情を展ぶ、元政の詩、袁宏道を宗とす、對燈に云ふ、臥
るに足る者か、

也、當時有明人陳元贊投化、遊京攝之間、元政與之定交、互相爲師友、有元元唱和集二卷、元政送元贊詩云、君能言和語、癖音舌尚在、久癖十知、九癖人猶未解、然則交接之久、陳頗解和語、足以展、此下有然陳因出我、元政詩宗兩情者歟、（下六字且無此注語）元政詩宗送元贊老人詩序云、余嘗暇日與元贊老人共閱近代文士雷何思鍾伯敬徐文長等集、特愛袁中郎之靈心巧發、不藉古人自爲詩爲文焉云云、其宗宏道、實陳老發之、（其詩命意頗秀、余嘗論云、國初之詩如石徵士松都講野子菴、非無佳句、其弊在格調殊卑之與、不免和習、獨元政或無此、）七言律、如秋日遊清閑寺、秋遊平等院、尤爲秀整、（秀、作、）若夫警句、殘燈人不見、深壁影相從、草深迷熱路、樹密失歸程、歲月枯藤老、風霜苦竹深、（能、因、）落葉鳴階

して讀む袁中郎、欣然短髮を摩す、又元贊老人を送る詩の序に云ふ、余嘗て暇日元贊老人と、共に近代の文士、雷何思鍾伯敬、徐文長等の集を闕す、特に袁中郎の靈心巧發、古人を藉らず、自ら詩を爲り、文を爲るを愛す、云云、其宏道を宗とする、實に陳老之れを發す、七言律に秋日清閑寺に遊ぶ、秋、平等院に遊ぶ如き、尤秀整たり、若し夫れ警句には、殘燈人見えず、深壁影相從ふ、草深くして熱路に迷ひ、樹密にして歸程を失す、歲月枯藤老ひ、風霜苦竹深し、（能、因、）落葉階前に鳴る、夜清ふして人未だ寢ねず、林間影あり、鳥羽を争ひ、村路人なく、牛自ら歸る、閑中の日月歳を知らず、定理の乾坤別に春あり、余特に山居の詩を愛す、云ふ、細雨密雲碧虛に盈つ、靜に看る林樹日に扶疎、箇中唯無窮の意あり、坐して青山に對して書を讀ます、

前夜清人未寢、林間有影鳥爭宿、村路無人
半自歸、閑中日月不知歲、定理乾坤別有春、
余特愛山居詩、云、細雨密雲盈、碧虛靜看林
樹日扶疎、箇中唯有無窮意、坐對青山不
讀書、(書下有「其有」
道之言五字、)

順庵木下先生、(無木下二字、)幼時得見僧天海、天
海奇之、(之作其爲人、)欲爲弟子、先生不可、年甫十
三、作太平賦、入天覽、云、後仕賀府、既而爲東
都學職、(無而字、)國初以來、詩宗宋元、至先生、斷
然唱唐詩、英傑之士、四方來歸焉、如白石、滄
浪、芳洲、霞沼、南海、蛻窟、皆出於其門、予嚮聞
之、先生墳墓在郭西青山、碑面刻題、請恭先
生之墓、無一字之碑志、豈如盧承慶、李夷簡
遺言、不志其墓之類乎、然有一疑團、當時木

順庵木下先生、幼時僧天海に見ゆるを得、天海之れを奇
とし、弟子と爲さんと欲す、先生可かず、年甫めて十三、太
平の賦を作り、天覽に入ると云ふ、後賀府に仕ふ、既にし
て東都の學職と爲る、國初以來、詩は宋元を宗とす、先生
に至りて、斷然唐詩を唱ふ、英傑の士四方より來歸す、白
石、滄浪、芳洲、霞沼、南海、蛻窟の如き、皆其門に出づ、予嚮
に之を聞くに、先生の墳墓、郭西の青山に在り、碑面に刻
して請恭先生の墓と題す、一字の碑志なしと、豈んど盧承
慶、李夷簡遺言して其墓に志さざるの如きの類か、然れ
ども一疑團あり、當時木門、英傑雲集、白石、滄浪等詩文上
梓す、而して先生の著作世に單行する者、未だ曾て見ず、
怪むべきなり、余後人の先生の所作を見るを得ざるを恐
る、因て扶桑名賢詩集に就て、其佳句を摘す、五言に、霜は

門、英傑雲集、白石滄浪等詩文上梓(等詩文上梓作)又各(又各)而先生著作、單行于世者、未嘗見焉、可

怪也、(可怪也、作爲門人、者無所逃其責)余恐後人不得見先

生之所作、因就扶桑名賢詩集、摘其佳句、

(因作)五言、霜散豐山曉、花飛長樂春、鳥啼

山色近、花落水聲高、一心存北闕、三世護南

朝、公補七言、晚烟邨落平林暗、夕日川原遠水

明、鄴臺人去荆榛合、驪岫雲還峻谷遷、豐國

故園殘夢藩城月、秋日高樓暮笛風、頗有唐

氣、(頗有唐氣、作皆宛然唐人也、宜乎附翼、鑿鑿有白石滄浪之語也。)

山崎闇齋嘗在浴室、令一門生洗其背、門生

曰、某、日者思梅花詩、願先生誦古人所作、涉

梅者以示焉、闇齋因誦五十餘首、(誦五十餘首、作詩五

十)其強記如此、而自運則最拙、(自運則最拙、作其理路勃

散す豐山の曉、花は飛ぶ長樂の春、鳥啼て山色近く、花落ちて水聲高し、一心北闕に存す、三世南朝を護す、補七言に「晚烟邨落平林暗し、夕日川原遠水明なり、鄴臺人去りて荆榛合し、驪岫雲還りて峻谷遷る、豐國故園殘夢藩城の月、秋日高樓暮笛の風」と、頗唐氣あり、

山崎闇齋嘗て浴室に在り、一門生に其背を洗はしむ門生曰、某日者梅花の詩を思ふ、願くは先生古人の作る所の梅に涉る者を誦して以て示されよ、闇齋因て五十餘首を誦す、其強記此の如し、而して自運は則最拙なり、愛宕山に登るに云ふ、願くは官房を毀ち地蔵を跡し、且杉檜を

笑、殆不可謂、登愛宕山云、願毀宮房、駭地藏、
 好自吐性靈、且驅杉槍、射天狗、遊朝熊云、人言天狗住朝
 熊、飛石雷奔耳亦響、借問今辰曷無事、我儂
 不是狄梁公、題石佛云、南山惟岫嶼、石佛立
 途右、我亦程門人、放光可斬首、所謂有韻之

文也、(此下有然庸軒詩、
 檢可調語八字)

貝原損軒先生日本詩史云、益軒之姪損軒、著
 名好古、是誤、益軒又號損軒、著
 述富贍、固不煩、余言、其有大疑錄、實爲古學
 之嚆矢矣、所謂豪傑之士也、若夫篇什亦自
 可見、(無自字)思鄉云、開到番花第幾員、故園見
 月幾回圓、晚風吹斷歸家夢、一段客懷屬杜
 鵑、按、扶桑千家詩、載、岷山中詩云、滿日烟雨自
 飢、氣、梅、蓋、香、花、濕、不、分、連、日、東、風、吹、積、雪、半、隨、
 流水半爲雲、是王禪登之詩、意者先生偶書之、人
 誤收錄者耳、無此注、鵑下有先生固不置、意于
 文墨者、猶能如是、宋廣
 平賦梅花之比也、之語、

辨審詩話上卷

て天狗を刺せん、朝熊に遊ぶに云ふ、人は言ふ天狗朝熊
 に住すと、飛石雷奔耳亦響す、借問す今辰曷も無事、我
 儂は是れ狄梁公ならず、石佛に題して云ふ、南山惟れ岫
 嶼、石佛途右に立つ、我も亦程門の人、光を放たば首を斬
 ら可し、と、謂はゆる有韻の文なり。

貝原損軒先生、日本詩史に云ふ、益軒の姪損軒名は好著述富
 贍、固より余が言を煩さず、其大疑錄ある、實に古學の嚆
 矢たり、謂はゆる豪傑の士なり、若夫篇什も亦自ら見る
 べし、舞を思ふに云ふ、開に到る番花第幾員、故園月を見
 る幾回の圓、晚風吹き断ふ歸家の夢、一段の客懷杜鵑に
 屬す、按ずるに扶桑千家詩に岷山中の詩を載す、云ふ、滿日烟
 雨自飢氣、梅蓋香花濕て分たず、連日東風積雪を吹き、
 半は流水に隨ひ半は雲と爲る、是れ王禪登の詩、意ふ
 に先生偶々之れを書し、人誤りて收録する者のみ、

富春山人作鳥碩夫傳略云、洛陽伏江隱士、鳥輔寬、字碩夫、號鳴春者、雖非抗顏爲人師、其詩極精練、爲四方嚮慕、且見其詩、感不與世之耳、剽目撥輩、同其調也、加旂家屢空、不爲祿仕、舉白彈琴、高吟自得、放浪於得喪之外、一子輔門、與其母安枯澹、門庭瀟灑、依稀謝無逸、蘇養直也、輔寬行年六十一歲、沒於家、輔門與其徒相謀、編遺稿、名曰芝軒吟稿、輔門不墜箕裘、孜孜教授者若干年、一病不起、年僅四十餘而沒、於戲關以西風雅、推鳥氏父子爲巨擘、況卓然有高尙之操者、石大拙後其誰也、余按碩夫姓鳥山、稱佐太夫、詩史云、名輔賢、誤矣、其詩宗尙晚唐、清新秀整、(秀整作實)一時之碩匠也、(實上有節操與)(有味)

富春山人鳥碩夫の傳を作る、略に云ふ、洛陽伏江の隱士、鳥輔寬、字は碩夫、鳴春と稱する者、抗顏、人の師と爲るに非ずと雖、其詩極めて精練、四方に嚮慕せらる、且其詩を見るに世の耳剽目撥の輩と其調を同うせざるに感ず、勝れに加ふるに家屢空しきも、祿仕を爲さず、白を擧げ琴を彈じ、高吟自得、得喪の外に放浪す、一子輔門、其母と枯澹に安じ、門庭瀟灑、謝無逸、蘇養直に依稀たり、輔寬行年六十一歲、家に沒す、輔門其徒と相謀り、遺稿を編し、名けて芝軒吟稿と曰ふ、輔門箕裘を墜さず、孜孜教授する者若干年、一病起たず、年僅に四十餘にして沒す、於戲關以西の風雅、鳥氏父子を推して巨擘と爲す、況や卓然高尙の操ある者、石大拙の後、其れ誰ぞや、余按するに碩夫姓は鳥山、佐太夫と稱す、詩史に云ふ、名は輔賢と、誤れり、其詩晚唐を宗尙し、清新秀整、實に一時の碩匠なり、韓人某、日觀要效を著し、碩夫の詩を以て日東第一と爲し、白石を以て軟弱と爲す、謂ふに碩夫の格調己に合するを以て、故に斯の言あり、碩夫の白石に於ける、恐くは同日の論にあらず、要するに作家たるに害なきのみ、田園秋興に云ふ、雨餘出水籬を透りて斜なり、引滿の小池、麻を漚すに堪へたり、昨夜西風、月明の裏、嫩黃吹き綻ぶ木

韓人某著日觀要致(著、人作)以碩夫詩爲日東第一、以白石爲軟弱、謂以碩夫格調今已、故有斯言(致、有、作)碩夫之於白石、恐不同日之論(堂、日作)要無害爲作家而已、田園秋興云、雨餘田水遠、籬斜引滿小池堪、漚麻昨夜西風月明裏、嫩黃吹綻木綿花、人影云、進退未曾離、此身由來同調似相親、除眞畢竟誰爲假、認取分明假是真、聞怨聞鶻云、應是子規啼不眠、聲聲聽到五更天、如今縱斷妾腸盡、莫破良人歸夢圓、移居云、欲寄萍蹤賃一軒、前臨市巷後田園、殷懃多謝東家竹、分得清陰、便到門。

碩夫有張良詩云、當時豈肯爲韓計、畢竟暴秦天下仇、可謂入留侯之胸臆者也。

綿花、人影に云ふ、進退未だ會て此身を離れず、由來同調相親しむに似たり、眞を除て畢竟誰を假と爲す、認取す分明假は是れ眞、聞怨、鶻を聞くに云ふ、應に是れ子規啼きて眠らざるなるべし、聲々聽到到る五更の天、如今縱ひ妾が腸を斷ち盡すとも、良人歸夢の圓なるを破る莫れ、所を移すに云ふ、萍蹤を寄せて一軒を賃らんと欲す、前は市巷に臨み、後は田園、殷懃多謝す東家の竹、清陰を分ち得て便ち門に到る。

碩夫、張良の詩あり、云ふ、當時豈肯、韓の爲に計るのみならんや、畢竟暴秦は天下の仇、と留侯の胸臆に入る者と謂ふべきなり。

閑計孤藤杖、老身一紙衣、曲渚舟橫草、深山
鐘度花、野梅過雪吐、山鳥畏人飛、極妙、(編妙、作亦、有奇、亦懸)而日本名家詩選、於二堀不錄一詩、可

怪。(可、怪、作、不、無、遺、恨、云、)

江兼通水若詩宗晚唐、或入宋調、南郭諸子目

爲晚唐、江君錫獨謂肖陸放翁、兼通詩才出

富春之上、居南湖之下、杜甫醉歸圖云、(杜、市、上、有、)

才情洋洋風、度蕭散八字、浣華溪上醉如泥、右倚吟筇左

小溪、步步玉顏歸去晚、草堂隔在野橋西、秋思

云、秋滿深宮燈影寒、蛩聲攪睡到更闌、珊瑚

枕上無窮恨、分付絲桐向月彈、長信秋詞云、

團扇拋來風正秋、鬢雲慵整玉搔頭、獨憐金

井梧桐葉、載得人愁出御溝、見此數首、(見、作、觀、首、)

(作、)爲肖放翁、未知言也。

江兼通水若詩晚唐を宗とし、或は宋調に入る、南郭諸子、目
して晚唐と爲す、江君錫獨り陸放翁に肖たりと謂ふ、兼
通の詩才富春の上に出で南湖の下に居る、杜甫醉歸圖に
云ふ「浣華溪上酔ふて泥の如し、右は吟筇に倚り左は小
溪、歩々玉顏歸去晚し、草堂は隔て、野橋の西に在り、秋
思に云ふ、秋は滿ちて深宮燈影寒し、蛩聲睡を攪して更
闌に到る、珊瑚枕上無窮の恨、絲桐に分付して月に向ふ
て彈す、長信秋詞に云ふ、團扇拋ち來りて風正に秋なり、
鬢雲整ふに慵し玉搔頭、獨憐む金井梧桐の葉、人愁を載
せ得て御溝を出づ、此數首を見て放翁に肖たりと爲す、
未だ言を知らざるなり。

富春山人、即徠翁、映中紀行(無徠翁)稱田省吾者是也、姓田中、字日休、居攝州池田(作卷、跡田)、與江子徹兼通、僧百拙爲詩友、著樵漁餘適八卷、奇詭放散(放散、作自放)、間有淺切之語、然亦肺腑中流出者也、如鳥飛搖樹影、牛過激溪聲、風起乍鳴竹、雪殘方認梅、萬卷曾非沽譽設、一竿實爲釣魚謀、心托龍泉獨慷慨、身扶鳩杖自婆娑、杏邨春日催花雨、松寺秋宵落葉風、坐釣鷺邊風和日、行歌犢外雪消時、柳垂新帶風烟態、梅瘦曾經霜雪委、又可傳矣、
余暇日評本邦詩家、以白石、蛟富、南海、南郭、南山南部、鳩巢、東涯爲稱首、白石、典雅富麗、刻琢精妙、亦人中之麟鳳、藝園之正朔、如三神山在海水縹渺之中、丹樓參差交影、可見不

富春山人、即徠翁、映中紀行に、田省吾と稱する者はなり、姓は田中、字は日休、攝州の池田に居る、江子徹兼通、僧百拙と詩友たり、樵漁餘適八卷を著す、奇詭放散、間、淺切の語あり、然れども亦肺腑中より流出する者なり、鳥飛んで樹影搖き、牛過ぎて溪聲激す、風起りて乍竹を鳴らし、雪残して方に梅を認む、萬卷曾て沽譽の設に非ず、一竿實に釣魚の爲に謀る、心龍泉に托して猶慷慨、身鳩杖に扶けられて自ら婆娑、杏邨春日花を催すの雨、松寺秋宵葉を落すの風、坐して釣る鷺邊風和の日、行歌犢外雪消る時、柳は垂れて新に帯ぶ風烟の態、梅は瘦せて曾て經たり霜雪の姿の如き、又傳ふべし。

余暇日本邦の詩家を評するに、白石、蛟富、南海、南郭、南山南部、鳩巢、東涯を以て稱首と爲す、白石は典雅富麗、刻琢精妙、亦人中之麟鳳、藝園の正朔、三神山の海水縹渺の中に在るが如く、丹樓參差として影を交え、見るべくして至るべからざるなり、蛟富は豪壯奇偉、變化百出、奇正互

可至也、蛻富豪壯奇偉、變化百出、奇正互用、殆不可端倪、溫藉少讓、縱橫有餘、本邦詩人、涉古未有之、如李晉王兵發、太原旌旗蔽日、戈戟刺天、而部下自一多胡人、南海概有明初語、濃豔秀拔、如趙皇后舞踏于堂上、楊太真出浴于華清、秀色可餐、而少老蒼之態、南郭紀律嚴正、而有頌容、如輪扁作輪、手得心應、又如周公負虛朝諸侯、威嚴可畏、溫和可愛、南山意思圓熟、如林處士泛舟西湖、優游自得、不知世間又有富貴、鳩巢體裁頗大、如曹參當國、寧失質野、能負大任、東涯平淡率易、如昭烈皇帝遇諸葛丞相、余一日在友人齋頭、閱紹述集、不覺日晷移、戲謂其人云、余坐了春風半日〔補〕

に用ひ殆端倪すべからず、溫藉少しく讓るも、縱橫餘りあり、本邦詩人、古に涉りて未だ之れ有らざる、李晉王の兵、太原を發して、旌旗日を蔽ひ、戈戟天を刺し、而して部下自ら一胡人多きが如し、南海は概して明初の語あり、濃豔秀拔、趙皇后の堂上に舞踏し、楊太真の華清に出浴するが如し、秀色鬻ふ可し、而して老蒼の態少し、南郭は紀律嚴正、而して頌容あり、輪扁の輪を作るに手得心應するが如く、又周公の康を負ひ、諸侯を朝し、威嚴畏る可く、溫和愛す可きが如し、南山は意思圓熟、林處士の舟を西湖に泛べ、優游自得、世間又富貴あるを知らざるが如し、鳩巢は體裁頗大、曹參の國に當り、寧質野に失するも、能く大任を負ふが如し、東涯は平淡率易、昭烈皇帝の諸葛丞相を遇するが如し、余一日友人の齋頭に在りて紹述集を閱みし、日晷の移るを覺えず、戲に其人に謂つて云ふ、余春風に坐了すること半日と。〔補〕

有女子而涉詩賦者、京師古春阿留東都桃
 仙、如立花氏井上氏、諸選已錄、今不具舉、桃
 仙年十三、自書所業、付于劊劊(劊劊、劊作)名曰、
 桃仙詩稿、漁父云、破笠短蓑一釣船、生涯只
 自任風煙、蓬窓午夜夢回後、空對蘆花明月
 前、詣祖墓云、推根報德是人倫、皮骨誰分太
 父身、他日陪君文若意、昔年撫我祖劉仁、抱
 恩罔極子還子、遺愛豈忘親亦親、到此凄然
 風木恨、荒墳空見綠苔新、古春阿留、共見扶
 桑千家詩、於戲形管之燁、一胡至於斯、以今
 日比之、不啻寥寥、風俗陵遲、真可慨矣、(實作)
 有農估而工篇什者、大井守靜、唐金興隆益
 田助(鶴、入江兼道、水若端隆、如鶴樓、若水、人皆
 知之、(人皆知之、作已錄之)守靜出詩史、興隆泉南人、有陶

女子にして詩賦に渉る者、京師の古春阿留東都の桃仙
 あり、立花氏井上氏の如き、諸選已に録す、今具に舉げず、
 桃仙年十三、自ら所業を書し劊劊に付し、名けて桃仙詩
 稿と曰ふ、漁父に云ふ、破笠短蓑一釣船、生涯只自ら風煙
 に任ず、蓬窓午夜夢回るの後、空く對す蘆花明月の前、祖
 墓に詣すに云ふ、根を推し德に報ゆ、是れ人倫、皮骨誰か
 分つ太父の身、他日君に陪す文若の意、昔年我を撫す祖
 劉の仁、恩を抱き極り罔し子還た子、遺愛豈忘れんや親
 亦親、此に到りて凄然風木の恨、荒墳空く見る綠苔の新
 なるを、古春阿留共に扶桑千家詩に見ゆ、於戲形管の燁
 一に胡ぞ斯に至れる、今日を以て之れに比せば、當に寥
 々たるのみならず、風俗の陵遲真に慨すべし。

農估にして篇什に工なる者、大井守靜、唐金興隆益田助、
 鶴、入江兼道、水若端隆あり、鶴樓、若水の如き、人皆之れを知
 る、守靜は詩史に出づ、興隆は泉南の人、陶菑の富あり、堂
 を垂裕と曰ふ、垂裕堂八景を擇び、歴く諸名士の題詠を

猗之窟(富作名)堂曰垂裕、擇垂裕堂八景、歷

請諸名士(諸名士、作天)之題咏(此下有白石、地集、諸先生、景者是也、十八字)、端隆江戶人(東部、作)、徙居

京師、夙有詩名。

村上友侘、京師醫官、與坦菴伊藤宗憲、仁齋、友善、

其詩渾成(詩下有清)、有古作者之風(風下有、南山東涯、爲、)、五言、溪聲寬酒渴、秋色役吟

魂、竹風吹不休、老境又逢秋、處世無長策、搔

頭有亂絲、七言、何處青山埃、吾骨誰家白酒

解、人愁一炷香烟微、雨後滿簾花影夕、陽前

絕句、閨情云、井梧霜重艸蟲悲、正是孤牀不

睡時、山月映窓燈映戶、良人今夜在天涯、暮

雨送人云、歌罷陽關淚濕衣、橋邊楊柳綠、依

依、離恨偏似風前絮、故向征人馬上飛、余特

依、離恨偏似風前絮、故向征人馬上飛、余特

請ふ端隆は江戸の人、京師に徙居す、夙に詩名あり

村上友侘は、京師の醫官、坦菴伊藤宗憲、仁齋と友とし善し、其詩渾成、古作者の風あり、五言に「溪聲酒渴を寬にし、秋色吟魂を役す」、竹風吹て休まず、老境又秋に逢ふ、世に處する長策無し、頭を搔て亂絲有り、七言に「何の處の青山か吾骨を埃つ、誰家の白酒か人愁を解く」、一炷の香烟微雨の後、滿簾の花影夕陽の前、絶句、閨情に云ふ、「井梧霜重、搔頭に映す、良人今夜天涯に在り」、暮雨人を送るに云ふ、「陽關を歌ひ罷んで、涙衣を濕す、橋邊の楊柳綠、依々、離恨偏に似たり、風前の絮、故に征人馬上に向つて飛ぶ」、余特に其冬夜亡友を憶ふの詩を愛誦す、云ふ、「四夏雨息で、月に昇る、薄々衣、衾夢長からず、永夜孤燈、雙眼の涙、老年多病、滿頭の霜、新知那ぞ似ん、舊知の好きに、牛別仍添ふ、死別の傷、爐底灰寒くして、殘醉盡き、此宵誰か是れ、鐵

愛誦其冬夜憶亡友詩(無愛字)云、四更雨息月

昇廊、薄薄衣衾夢不長、永夜孤燈雙眼淚、老

年多病滿頭霜、新知那似舊知好、生別仍添

死別傷、爐底灰寒殘醉盡、此宵誰是鐵肝

腸(腸下有樓槍有味四字)

仁齋詩才與友恠、鴈行爲學術所蔽、往往人

不稱其詩、亦不幸也(不幸作一厄)五月雨云、梅雨

街頭水漫流、開門風氣似深秋、南鄰北舍人行

絕、自拔板橋爲小舟、北野卽事云、北野祠

前千樹梅、殘葩寂寞晚風開、月明未上林塘

上、空逐暗香過野臺、題梅花圖云、雪深湖上

獨家村、招得梅花枝上魂、驛使近來音信絕、

一尊看到月黃昏、高雅清俊、亦可見其爲人

也。(無高雅云云十一字)

肝腸

一八

仁齋の詩才、友恠と鴈行す、學術の蔽ふ所と爲り、往々人其詩を稱せず、亦不幸なり、五月雨に云ふ、梅雨街頭に水漫流す、門を開けば風氣深秋に似たり、南鄰北舍人行絶え、自ら板橋を抜て小舟と爲す、北野卽事に云ふ、北野祠前千樹の梅、殘葩寂寞晚風に開く、月明未だ上らず林塘の上、空く暗香を逐ふて野臺を過ぐ、梅花圖に題するに云ふ、雪は深し湖上獨家の村、招き得たり梅花枝上の魂、驛使近來音信絶え、一尊看て到る月黃昏、高雅清俊亦其人となりを見るべき爲り。

渡邊宗臨、字道生、號正菴、父益西、家日向延岡、應有馬侯直純之聘、正菴幼而好學、成童遊京師、兼通儒醫、時屬干戈戰爭之餘、文教掃地、況鄉處僻遠、人不知文學、正菴日講藝授徒、門徒數百人、至侯之子康純、以正菴爲嗣君侍讀、(無之)後嗣君寵昵嬖臣、正菴與其傅諫之、不聽、遂其傅、併錮正菴、(不聽九字作)居二年、得歸鄉、猶不得往、他邦接士人、正菴亦不樂宦仕、(亦不五字作)嚮藥爲業、時年四十餘、奉導子弟、日徜徉花塲清泉之中、(時年)至清泉之中、(作元諱)有詩云、活計田三畝、羲已卯歲卒、(雷七字)有詩云、活計田三畝、羲皇千古心、十年何所得、松竹四鄰深、又云、半畝丘園半畝池、更無塵事到茅茨、山間明月清風外、一二病夫來請醫、元祿己卯歲沒、

渡邊宗臨、字は道生、正菴と號す、父益西、日向の延岡に穿す、有馬侯直純の聘に應ず、正菴幼にして學を好み、成童京師に遊ぶ、兼て儒醫に通ず、時に干戈戰爭の餘に屬し、文教地を掃ふ、況や鄉僻遠に處し、人、文學を知らず、正菴日に藝を講し、徒に授く、門徒數百人、侯の子康純に至り、正菴を以て嗣君の侍讀と爲す、後嗣君嬖臣を寵昵す、正菴其傅と之を諫む、聽かず、其傅を逐ひ、併せて正菴を錮す、居る二年、郷に歸るを得たり、猶他邦に往て士人に接するを得ず、正菴亦宦仕を樂まず、藥を嚮て業と爲す、時に年四十餘、子弟を奉導し、日に花塲清泉の中に徜徉す、詩あり云ふ、活計田三畝、羲皇千古の心、十年何の得る所ぞ、松竹四鄰深し、又云ふ、半畝は丘園半畝は池、更に塵事の茅茨に到る無し、山間の明月清風の外、一二の病夫來りて醫を請ふ、元祿己卯の歲沒す、具に紹逸文集に見ゆ。

〔無元味已卯歲没六〕具見于紹述文集〔無字〕

日本詩史云〔無日〕閱鶴樓詩殊無佳者〔無殊〕

〔要緣諸名士不朽耳余云鶴樓好詩不〕

歷鍛鍊〔不歷鍛鍊作〕所以多拙累也〔此下云〕

一夏日江村云鷓鴣爭浴弄斜暉竹裏人家竹四

圍片雨送雲山色淨同風暖岸口烟微孤舟渡口

紅鬢繞柴扉第八句犯第二句淡邊江路黑白蘋

犯然不無佳句〔此下有續錄〕五言草淺風吹

水林疎月到庭水綠冰依岸山明日暎霞霽

雪生山氣流澌弄水光七言竹打敗窗霜氣

冷香飄深壁水沉寒細竹林中新迸筍斜枝

葉底暗藏梅樓前風雨中秋色笛裡關山獨

夜心翻經竹氣漸侵榻洗鉢荷香欲觸衣

〔此下有林端夕日開樵隱竹外寒烟繞釣磯越樓親笑于白石先生尤有年矣筆墨遲蹙先生

賀開之如此數句誰謂不佳豈有緣人不朽伯鄰乎〕

日本詩史に云ふ鶴樓の詩を闕するに殊に佳なる者なし、要するに諸名士に縁て不朽なるのみ、余云ふ鶴樓詩を好み鍛鍊を歴す、拙累多き所以なり、然れども佳句なきにあらず、五言「草淺くして風、水を吹き、林疎にして月庭に到る」、水縁に冰岸に依り、山明に日霞に暎す、霽雪山氣を生じ、流澌水光を弄す、七言「竹は敗窓を打て霜氣冷、香は深壁に飄て水沈寒し」、細竹林中新に筍を迸らし、斜枝葉底暗に梅を藏す、「樓前風雨中秋の色、笛裡關山獨夜の心」、經を翻して竹氣漸く榻を侵し、鉢を洗ふて荷香衣に觸れんと欲す。」

又云、桐葉編卷末、附載竹溪詩數十首、(無附字)跋亦竹溪作、而無序、以朝神和歌一首、代之、竹溪余未詳其人、以先師笠原遺稿爲翫弄具、爲售己名奇貨、輕薄亦甚、余讀之、而實鄙竹溪之爲人、後得桐葉編徵君錫之言、卷首實有和歌一首、及竹溪小文、然卷末所附竹溪詩者、乃書估梅井秀信之所爲、題曰竹溪遺稿、蓋竹溪嘗選錄桐葉編、剽削未成而沒、秀信因附其師之集後、以謀不朽、亦自美意、竹溪無毫與焉、(無上有固字)君錫尤之、真冤矣哉。

望富岳詩、諸家所難、前後作者共不得真面目、或曰、白扇倒懸、或曰、四時覆絮帽、皆兒童之見也、(見作言)至秋玉山、一洗舊套、不落囁喞

又云ふ、桐葉編の卷末に、竹溪の詩數十首を附載す、跋も亦竹溪の作、而して序無し、朝神の和歌一首を以て之れに代ふ、竹溪、余未だ其人を詳にせず、先師の笠原遺稿を以て翫弄の具と爲し、己が名を售る、奇貨と爲す、輕薄も亦甚し、余之れを讀み、而して實に竹溪の人と爲りを鄙しむ、後桐葉編を得、君錫の言に徵するに、卷首實に和歌一首及び竹溪の小文あり、然れども卷末附する所の竹溪の詩は、乃書估梅井秀信の爲す所にして、題して竹溪遺稿と曰ふ、蓋、竹溪嘗て桐葉編を選録し、剽削未だ成らずして沒す、秀信因て其師の集後に附し、以て不朽を謀る、亦自ら美意、竹溪毫も與るなし、君錫之れを尤む、真に冤なるかな。

富岳を望む詩、諸家難しとする所、前後作者共に真面目を得ず、或は曰、白扇倒に懸る、或は曰、四時絮帽を覆ふ、と、皆兒童の見なり、秋玉山に至りて舊套を一洗し、囁々細響に落ちず、其詩に云ふ、帝、寫崑の雪を掬し、之れを

細響(不辨六字作爲雄壯之語)其詩云帝掬崑崙雪置之
 扶桑東突兀五千仞芙蓉插碧空起語壯則
 壯(語作承)然似崑崙特大若賞咏崑崙以富
 嶽爲崑崙一掬之雪(掬作片無之字)則可落句插
 字摸寫入妙要無害爲傑作近時栗山先生
(作樂學士)亦有此作云誰將東海水洗出玉芙
 蓉蟠地三州盡拂天八葉重烟霞蒸大麓日
 月照中峰獨立元無競終爲衆嶽宗一時傳
 播稱爲傑作然竟不如妙法院堯恕法親王
 詩云(稱爲八字作在人耳目亦自秀拔)堯恕(堯恕七字作親王堯恕有詩云)士峰
 天色冷屹立曉霞紅飛出青霄外倒沉蒼海中
 浮雲來往變積雪古今同壓盡衆山頂獨能
 鎮日東起語少劣(起語上有有原爲傑作四字)頷聯千古絕
 唱(詩蘭侯望岳云雲霞連大海此下有豪而不日月宿中峯暗合栗山語粗實而不便言)

扶桑の東に置く、突兀五千仞、芙蓉碧空に挿む起語壯は
 則壯、然れども崑崙特に大なるに似たり、若し崑崙を咏
 するに當りて、富嶽を以て崑崙一掬の雪と爲さば則可、
 落句の挿の字摸寫妙に入る、要するに傑作たるに害な
 し、近時栗山先生にも亦此の作あり、云ふ、誰か東海の水
 を將て、洗ひ出す玉芙蓉地に蟠て三州盡き、天を拂ふて
 八葉重る、烟霞大麓に蒸し、日月中峯を照す、獨立元競ふ
 無し、終に衆嶽の宗と爲る、一時傳播稱して傑作と爲す、
 然れども竟に妙法院堯恕親王の詩に如かず、云ふ、士峯
 天色冷屹立曉霞紅なり、飛ひ出す青霄の外、倒に沉む蒼
 海の中、浮雲來往變じ、積雪古今同じ、衆山の頂を壓盡し
 て、獨能く日東を鎮む、起語少く劣る、頷聯千古の絶唱、
 詩蘭侯の望岳に云ふ雲霞連大海に連り、
 日月中峯に宿す、栗山の語と暗合す、

得如此、恐無後人
有措手處、二十字、

蛻崑先生望嶽詩、蛻黃牛峽古語、於翁之伎倆、固不足言。

詠新嫁娘詩、往往見于諸家集中、徠翁云、小姑是阿姐、大姑是阿娘、但愁未嫁日、不慣喚吾郎、服仲英云、夙先夫婿起、斂鬢暗含羞、未慣新婦事、都就阿母謀、餘熊耳云、三日騰婢去、書字報阿爺、只言舅姑好、不言郎如何、(仲英詩在熊耳之後)江北海云、隨姑厨下立、承命試調羹、未熟家僮面、(僮、作)時時誤喚名、徠翁含蓄所以爲冠、熊耳婉曲次之、仲英北海不免塵詮、(不免塵詮、作亦自陳、套、斤兩相當、又次之)二子稱爲工、脂粉之語、(稱、作)而不及二翁、所謂尺有所短也。

蛻崑先生望嶽の詩、黃牛峽の古語を襲ふ翁の伎倆に於て固より言ふに足らず。

新嫁娘を詠する詩、往々諸家の集中に見ゆ、徠翁云、小姑は是れ阿姐、大姑は是れ阿娘、但愁ふ未だ嫁せざる日、吾郎を喚ぶに慣れず、服仲英云、夙に夫婿に先だちて起き、鬢を斂めて暗に羞を含む未だ新婦の事に慣れず、都て阿母に就て謀る、餘熊耳云、三日騰婢去る、書字阿爺に報ず、只言ふ舅姑好しと、郎の如何を言はず、江北海云、姑に随つて厨下に立ち、命を承て調羹を試む、未だ熱せず家僮の面、時々誤りて名を喚ぶ、徠翁含蓄、冠と爲す所以熊耳婉曲之れに次ぐ、仲英北海塵詮を免れず、二子稱して脂粉の語に工みなりと爲す、而して二翁に及ばず、謂はゆる尺も短き所あるなり。

秋玉山鸚鵡杯云、綺席飛杯醉、爭傳鸚鵡名、何須更作賦、狂自勝稱生、高子亦有此作云、
(亦作)有杯呼鸚鵡、飛時春酒流、假我能言語、
(又)欲吐萬古愁、玉山尤工五絕、而比諸子式、實爲天淵、然亦一日短長、不終身優劣、玉山五絕得意者、(得意、作可得、傳)不啻子式之不及矣。

鷓孟一士爲性愛才、服仲英羈旅、不能自存、孟一衣食之後、遂爲服翁義子、安文仲亦得孟一之顧盼、能成其業、孟一有桃花園集、與孟一並時者、有安文仲、菅習之、菅道伯、諸人、大抵詩才相敵、千詩如一詩、讀之則恐臥矣、其名不朽、殆天幸矣、(補)

南宮喬卿、劉文翼、紀世馨、三子同時、雄視一方、亦魯衛之政也、六如上人初學詩于文翼、

秋玉山の鸚鵡杯に云ふ、綺席杯を飛して酔ふ、争て傳ふ鸚鵡の名、何ぞ須ひん更に賦を作るを、狂自ら生と稱するに勝る」と、高子式も亦此作あり、云ふ、杯あり鸚鵡と呼ぶ、飛ぶ時春酒流る、我に能く言語するを假さば萬古の愁を吐かんと欲す、玉山尤五絶に工なり、而して諸を子式に比すれば、實に天淵と爲す、然れども亦一日の短長にして終身の優劣にあらず、玉山五絶得意の者、菅に子式の及ばざるのみならず。

鷓孟一士性たる才を愛す、服仲英羈旅自ら存する能はず、孟一之れに衣食す、後遂に服翁の義子と爲る、安文仲亦孟一の顧盼を得て能く其業を成す、孟一は桃花園集あり。

孟一と時を並ぶる者、安文仲菅習之菅道伯諸人あり、大抵詩才相敵す、千詩一詩の如く、之を讀むときは則ち臥せんことを恐る、其名の朽ちざるは殆天幸なり、(補)

南宮喬卿、劉文翼、紀世馨、三子、時を同じくし、一方に雄視す、亦魯衛の政なり、六如上人初め詩を文翼に學ぶ、文翼、

文翼有龍門集。

藤文二日本名家詩選(無日本二字)載文翼楚宮詞云爲有細腰宮女妬瑤姬夢裡不會來是沿襲高太史楚宮詞細腰無限空相妬不覺瑤姬夢裡逢而意義淺露(此下有所謂屋下架屋也七字)不足採錄。

又載江北海送礪溪上人還鄉云(北海作君遙知故國青蓮色不改清香待汝歸結句全襲唐人不改清陰得我歸之語文二收之真選錄之難也北海自有好詩題太真竊笛圖云金鞍齊立五王馬苑外打球楊柳遮內殿無人鸚鵡靜倚欄潛奏落梅花落葉云玉殿西風冷碧羅琳池秋水晚來波美人休奏哀蟬曲落葉紛紛白露多漢武帝憶李夫人云

龍門集あり。

藤文二の日本名家詩選文翼の楚宮詞を載す云ふ細腰宮女の妬あるが爲に瑤姬夢裡會て來らずと是れ高太史の楚宮詞に細腰限り無く空相妬む覺えず瑤姬夢裡に逢ふを沿襲す而して意義淺露採録するに足らず。

又載す江北海礪溪上人郷に還るを送るに云ふ遙に知る故國青蓮の色清香を改めず汝が歸るを待つ結句全く唐人の清陰を改めず我が歸るを待つ可語を襲ふ文二之を收む真に選錄の難きなり北海自ら好詩あり太真竊笛の圖に題して云ふ金鞍齊く立つ五王馬苑外打球楊柳遮る内殿人無く鸚鵡靜欄に倚りて潛に奏す落梅花落葉に云ふ玉殿西風碧羅冷か琳池秋水晚來波たつ美人奏するを休めよ哀蟬の曲落葉紛々白露多し漢の武帝李夫人を憶ふに云ふ漢宮の明月流黃を照す錦帳偏に懷ふ傾國の粧玉露凋傷す連理の樹金爐髣髴返魂香秋風恨あり汾水に横はる良夜柏梁に宴するに心

淡宮明月照流黃錦帳偏懷傾國粧玉露凋
傷連理樹金爐髣髴返魂香秋風有恨橫汾
水良夜無心宴柏梁萬里瑤池猶寄信松楸
咫尺斷人腸練辭秀整(秀整二字互見)極是佳處

(極作)細玩其詩似學謝山人者也。

緇流之詩以法霖百拙萬菴大潮爲巨擘元
政月潭無隱若霖文川凍適次焉如萬菴大
潮諸公詩名箕斗亦不煩言月潭名道澄有
龍嵩嵒居二集(此下有語語性靈不拘拘執
者數首)秋夜宿卽覺山房云偶來尋逸士
就宿古梅峯犬吠風鳴竹鳥驚雨打松燈花
開又落茶味淡還濃夜久清譚罷臥聽草下
蟲登月輪山云溪行數里聽流泉又踏嶮嶂
上碧巖萬簇雲霞紅暎日千章杉檜翠參天

無し萬里瑤池猶信を寄す松楸咫尺人腸を斷つ練辭秀
整極めて是れ佳處細に其詩を玩ぶに謝山人を學ぶ者
に似たり。

緇流の詩は法霖百拙萬菴大潮を以て巨擘と爲す元
政月潭無隱若霖文川凍適は焉に次ぐ萬菴大潮諸公
の如き詩名箕斗亦言を煩はさず月潭名は道澄龍嵩
嵒居二集あり秋夜宿卽覺山房に宿すに云ふ偶來りて逸
士を尋ぬ就て宿す古梅峯犬吠て風竹に鳴り鳥驚て雨
松を打つ燈花開て又落つ茶味淡還濃夜久して清譚
罷み臥して聽く草下の蟲月輪山に登るに云ふ溪行數
里流泉を聽く又嶮嶂を踏んで碧巖に上る萬簇の雲霞
紅日に映す千章の杉檜翠天に參す殘僧屋あり庭葉を
堆くし古像籠なく爐烟を斷つ藤相の遺蹤荒寂甚し夜
深く誰か對せん月輪の圓雪中の作に云ふ四野寒凝り
て雪色形なり須臾に瓊府長空に滿つ庭前笑て對す梅
粧の臉崖畔憐み看る竹射を曲ぐるを歸鳥棲に迷ふ林

殘僧有屋庭堆葉、古像無龕爐斷烟、藤相遺蹤荒寂甚、夜深誰對月輪圓、雪中作云、四野寒凝雲色、形須曳瓊屑、滿長空、庭前笑對梅粧臉、崖畔憐看竹、曲躬歸鳥迷、棲林上下、獵人失徑、碕西東、灞橋騷興非吾事、獨憶鼇山晏坐翁、文川學詩于梁蛻崑、著文川集、凍滴學于龍草廬、頗有才思、著豹隱集、行于世。

小倉尙齋、名貞、字實操、與縣周南共爲長藩文學、著唐詩趣八卷、行于世、然諸選不錄一詩、余嘗得其秋郊七律一篇云、孤村接野草、離披脩竹斷橋懸、酒旗風散乾紅楓、滿徑雨添寒碧水、侵陂高田人帶殘陽穫、隘巷家交踈、鬻炊解印知歸、是何者、古來唯有老陶辭、極佳、以當時徠學大行家、戶祝王李、風尙殊

の上下獵人徑を失す碕の西東、灞橋の騷興吾事に非ず、獨憶ふ鼇山晏坐の翁、文川詩を梁蛻崑に學ぶ、文川集を著す、凍滴は龍草廬に學んで、頗有才思あり、豹隱集を著す、世に行はる。」

小倉尙齋名は貞、字は實操、縣周南と共に長藩の文學たり、唐詩趣八卷を著す、世に行はる、然れども諸選一詩を錄せず、余嘗て其秋郊七律一篇を得たり、云ふ、孤村野に接して草離披、脩竹斷橋酒旗懸る、風は乾紅を散じて楓徑に滿り、雨は寒碧を添へて水陂を侵す、高田人は殘陽を帯びて穫り、隘巷家は陳鶴に交えて炊ぐ、印を解て歸を知る是れ何物ぞ、古來唯老陶の辭有り、と極めて佳なり、當時徠學大に行はれ家、王李を戶祝し、風尙殊異なるを以て、其名濯晦せり、嘆すべきなり。

異其名灑晦、可嘆也。(極佳以下作、剪裁頗工、乃是宋人住語、以當時

律學大行詩風一變、童子恥爲、宋元語、故其名運晦、可嘆矣耳。)

金華山人、個儻使氣、人稱爲狂生、嘗有言曰、
 圈發去聲、句讀一寸五分、其所作亦有此意、
 物門諸彥乘月賦詩、金華沈思久之、蹙然拍
 髀曰、吾得之、人問曰、所得何也、曰、唯得明月
 二字。

猗蘭侯不能詩、如曉天來急雨、暑去早涼新、
 仲秋空月色、夜雨草堂中、百杯百杯又百杯、
 黃鳥一聲酒百杯、可見其一、春日村居云、青
 雲何所樂、高枕是生涯、心靜看彌靜、疎花日
 夕佳、瀟散有味、(補)

筑波山人、師事尚南先生、夙享詩名、才華亦
 自爲諸子之冠、如談舌溢如缺、醉顏笑似猿、

金華山人、個儻氣を使ふ、人稱して狂生と爲す、嘗て言あり、曰く、圈發去聲、句讀一寸五分と、其作る所、亦此意あり。
 物門の諸彦、月に乘じ詩を賦す、金華沈思久しふす、蹙然として髀を拍て曰、吾れ之れを得たりと、人問ふて曰、得る所は何ぞや、曰、唯明月の二字を得たりと。

猗蘭侯詩を能くせず、曉天急雨來り、暑去りて早涼新なり、
 仲秋月色空し、夜雨草堂の中、百杯々々又百杯、黃鳥一聲酒百杯と、
 其一を見る可し、春日村居に云ふ、青雲何の樂む所ぞ、
 高枕是れ生涯、心靜に看て彌靜に、疎花日夕佳なりと、瀟散にして味あり、(補)

筑波山人、尚南先生に師事し、夙に詩名あり、才華亦自ら諸子の冠たり、談舌溢りて缺の如く、醉顏笑ふて猿に似

殆不堪胡盧予愛其咏野史詩中有妓王落
句云日晚嗟蛾人不見孤灯燈月照幽棲趣
味雋永不恥其師〔補〕

余夙聞浪華葛子琴工詩後得野史咏一卷
讀之〔讀、作〕中收子琴詩特多〔中收七字、作
急服其才思〕源義朝云文公辭魯便逢寄智伯頭顱
孰乞憐紫式部云澄心風月秋三五寫思鶯
花帖六十〔十平用〕安倍宗任云獄中春發梅花
色暮下風高大樹枝用事穩帖真才子也〔真
才人所難、亦〕

野史咏中有岡元鳳咏楠正行音調清暢氣
格高雅實壓倒諸子〔無實〕云南朝興廢向誰
論芳野雲深護至尊臣節寧忘王紐解將門
復見父風存連枝棣萼傳遺愛一樹樞楠守

たりの如き殆胡盧に堪えず予其野史を咏する詩を愛
す中に妓王あり落句に云ふ「日晚れて嗟蛾人見えず孤
燈汀月幽棲を照らす」と趣味雋永其師に恥ぢず〔補〕

余夙に浪華の葛子琴詩に工なりと聞く後野史咏一卷
を得て之れを讀む中に子琴の詩を收むる特に多し源
義朝に云ふ「文公辭魯便ら害に逢ふ智伯頭顱孰か憐み
を乞はん」紫式部に云ふ「澄心風月秋三五思を寫す鶯花
帖六十〔十平用〕安倍宗任に云ふ「獄中春は發く梅花の色暮
下風は高し大樹の枝用事穩帖真に才子なり」

野史咏中に岡元鳳の楠正行を咏するあり音調清暢氣
格高雅實に諸子を壓倒す云ふ「南朝の興廢誰に向つて
論ぜん芳野雲深くして至尊を護す臣節寧ぞ忘れん王
紐の解くるを將門復見る父風の存するを連枝棣萼遺
愛を傳へ一樹樞楠古根を守る負かず精忠能く主に報

古根不負精忠能報主、殘陽淪沒鶴鶴原。

①殘陽淪沒す鶴鶴原。

弊帚詩話上卷 終

弊帚詩話下卷

江都 西島長孫元齡著

東涯先生(作伊仲春偶書)云、午睡醒來困、又逢問字人、又平明云、問奇人未到、隱几讀毛詩(論作)二句寫出書生之態、妙不可言、非居其境者、胡能解得此意。

東涯好用半日間字、余所手抄、東涯詩集二卷、(集作抄)中用三四十箇、(作其中凡)徂來好用何物字、(好上有)如何物芙蓉落日寒、何物梅前吹斷笛、何物白雲晨自媚、何物袈裟來映好、可厭甚矣。

著作之富、以伊東涯、室滄浪、服南郭(作服子運、室滄浪、伊

東涯先生の仲春偶書に云ふ、午睡醒め來りて困し、又逢ふ字を問ふの人、又平明に云ふ、奇を問ふ人未だ到らず、几に隱りて毛詩を讀む、二句書生の態を寫出し、妙言ふべからず、其境に居る者に非れば、胡ぞ能く此意を解し得ん。

東涯好んで半日間の字を用ふ、余の手抄する所の、東涯詩集二卷中に三四十箇を用ふ、徂來好んで何物の字を用ふ、何物ぞ芙蓉落日寒し、何物ぞ梅前吹斷の笛、何物ぞ白雲晨自ら媚ふ、何物ぞ袈裟來映好し、の如し、厭ふべき甚し。

著作の富は、伊東涯、室滄浪、服南郭を以て第一と爲すべ

東)可爲第一高子式次焉、近時蕉中師亦
 有集五十卷、可謂盛矣、(無此)江北海(作君)
 日本詩選評云、屈南湖平生所作、殆且萬首、
(此下有可謂)若夫萬首詩、日課一首、積三十
 年而始得焉、如南湖者、求諸異邦、夫梅都官
 陸放翁流亞也。

室滄浪前後文集三十卷、從東都赴賀府途中
 所得(傳、作)四十三首、其精力可見、(精力、作)
 大抵人在久役、罷勸廢事、不能一日得一詩、
(詩、作)況彼道途不出十日、而得四十三首乎、
 余嘗聞之松窓先生(無書)平澤旭山(旭山、作)
 足蹟殆遍天下(蹟、作)所到投宿、必先取一
 日中所見所聞、筆而藏巾笥、後遂成編、前輩
 用意有如此者、

し高子式焉に次ぐ、近時蕉中師も亦集五十卷あり、盛な
 りと謂ふべし、江北海の日本詩選の評に云ふ、屈南湖平生
 作る所殆且に萬首ならんとす、若し夫れ萬首の詩、日に
 一首を課し、三十年を積んで而して始めて得南湖の如
 き者、諸を異邦に求れば、夫れ梅都官、陸放翁の流亞なり。

室滄浪の前後文集三十卷、東都より賀府に赴く、途中得る
 所、四十三首、其精力見る可し、大抵人久役に在る、罷勸事
 を廢し、一日一詩を得る能はず、況や彼の道途十日に出
 でず、而して四十三首を得るをや、余嘗て之れを松窓先
 生に聞く、平澤旭山、足蹟殆ど天下に遍し、到る所投宿す、
 必先づ一日中見る所聞く所を取りて、筆して巾笥に藏
 し、後遂に編を成すと、前輩意を用ふる此の如き者あり。

物徂來、意在、靴、回、舊、弊、(無、在、)強、爲、高、華、峻、拔、
 之、語、然、集、間、有、不、類、不、生、所、作、者、(集、下、有、)
 次韻芳擔子侯冬曉之什云、園林緜緜不知
 冬、夜宴彈殘風入松、竹火籠、灰侍兒睡、忽聽
 城上五更鐘、櫛月瓦霜寒、弄冬、西園仙籟滿
 杉松、五更夢斷何情況、一樣花時長樂鐘、又
 田家卽事田家女子厭蠶桑、多學東都新樣
 粧、恰是年年官債重、賣身好與冶遊郎、是戲
 言中又諷時事者也、江上田家、門巷隨江曲、
 田家籬落稀、岸低洗耕具、雨霽曝漁衣、小犢
 負薪飲、扁舟刈麥歸、兒童沙上戲、鷗狎不高
 飛、可謂田家寫照、如關山月、雲夢歌、古城、秋
 望、閑居、可爲合作、又多、大拙、大俗者、諸子紛
 紛、輿、雨、來、還、憐、熊、府、熊、生、聘、巧、似、宗、元、在、柳

弄璋詩話下卷

物徂來、意、舊、弊、を、靴、回、するに在り、強て高華峻拔の語を
 爲す然れども集間、本生作る所に類せざる者あり、芳擔
 子侯冬曉の什に次韻して云ふ、園林、以々冬を知らず、夜
 宴彈殘風松に入る、竹火灰を籠めて侍兒睡る、忽聽く城
 上五更の鐘、櫛月瓦霜寒冬を弄し、西園仙籟杉松に滿つ、
 五更夢斷へて何の情況ぞ、一樣花時長樂の鐘、又田家卽
 事に、「田家女子蠶桑を厭ひ、多く東都の新樣粧を學ぶ、恰
 是れ年々官債重し、身を賣りて好し與ふ冶遊郎、是戲言
 中又時事を諷する者なり、江上田家に、「門巷江曲に隨ふ、
 田家籬落稀なり、岸低て耕具を洗ひ、雨霽れて漁衣を曝
 す、小犢薪を負ふて飲み、扁舟麥を刈りて歸る、兒童沙上
 に戲る、鷗狎れて高く飛ばず、」田家の寫照と謂ふべし、關
 山月雲夢歌、古城、秋望閑居の如き、合作と爲すべし、又大
 拙大俗の者あり、「諸子紛紛雨と來る、還て憐む熊府熊生
 の聘、」巧は似たり宗元の柳州に在るに、野搗讖、三河に祇
 役し朝鮮聘使を護送するを錢するに云ふ、「日本三河侯
 伯の國朝鮮八道支那の郡、野搗讖に寄別す、海驛元通す、
 池鯉鮒別來尺素數、相聞す、」藤像侯艸堂に枉けらるゝ
 に云ふ、「白馬銀鞍金鍔刀、使君駒從江皋に塞がる、是の數
 の如き、將に乃公の爲に諸を江中に沉め、其拙を穢せん

州、饒野爲謙祇役三河護送朝鮮聘使云、日本三河侯伯國、朝鮮八道支那鄰、寄別野橋謙、海驛元通池鯉鮒、別來尺素數、相聞藤豫

侯見、枉艸堂云、白馬銀鞍金錯刀、使君驕從塞江泉、如是數語(語作)將爲乃公沉諸江

中、藏其拙而已、予常愛其隘、界河詩云、土人爭看傳車間、塵尾遙塵落日閑、自古峽陽應罕見、風流使者問名山、塞上曲贈湖中二子二絕、皆余所愛。

石徵士之後、隱者而巧詩(巧作)余得三人、

曰平崑仙桂、曰烏山碩夫碩夫前錄、曰澤村琴所、

仙桂初爲母執質于加賀侯、後倣徵士之嘉

適、移病歸東山泉涌舊業、以詩賦自娛(自娛終)

徵士遺言、以六六山堂附與仙桂、仙桂素

とするのみ、予常に其界河を臨ゆる詩を愛す、云ふ、土人争ふて看る傳車の間、塵尾遙に墜す落日閑なり、古より峽陽應に罕に見るなるべし、風流の使者名山を問ふ、塞上曲湖中二子に贈る二絶、皆余が愛する所なり。

石徵士の後、隱者にして詩に巧なる者、余三人を得たり、曰く、平崑仙桂、曰く、烏山碩夫碩夫前錄、曰く、澤村琴所、仙桂初め母の爲に質を加賀侯に執る、後徵士の嘉適に倣ひ、病を移して東山の泉涌舊業に歸り、詩賦を以て自ら娛む、徵士遺言して、六々山堂を以て、仙桂に附與す、仙桂素と名聲に近づかず、終に臨み其詩草を火く、後賀府大澤猶興、遺篇を輯録し、鬚桐集と名く、往々佳句あり、紅葉一溪

不近名聲(圓、(裏作)臨終(易、(終作)火其詩帥、後、賀府大澤猶興、(後上有)輯錄遺篇、名譽、桐集、

往往有佳句、紅葉一溪水、青苔半徑霜、溪中

薰細菊、塘外倒枯蓮、梅分疎影一簾月、松送

清音孤洞風、高原靜睡耕牛晚、細雨斜飛乳

燕天(此一、條移在、下卷之首、)

琴所名維顯、字伯揚(陽、(揚、作)爲、彦根世臣、以

病退、居城南松寺村、築松雨亭、絕意于仕途、

左、琴、右、書、赤貧如洗、晏然不屑(附下有)遂

能終其操、有琴所稿刪二卷(此下有詩體類、其爲人六字、)

風流溫藉(溫藉、作)尤爲可愛、即事云、幽齋讀

書罷、靜嘯岸、烏紗、遙見前邨、暮歸牛渡、稻花、

滋賀懷古云、湖水悠悠、王氣空、禁城陳跡、浦

雲中、山花不解、前朝恨、依舊飛香、轡路風、悼

の水、青苔半徑の霜、溪中細菊薰す、塘外枯蓮倒る、梅は疎影を分つ、一簾の月、松は清音を送る、孤洞の風、高原靜に睡る、耕牛の晩、細雨斜に飛ぶ、乳燕の天、

琴所名は維顯、字は伯揚、彦根の世臣たり、病を以て城南松寺村に退居し、松雨亭を築き、意を仕途に絶つ、琴を左にし、書を右にし、赤貧洗ふが如し、晏然屑とせず、遂に能く其操を終ふ、琴所稿刪二卷あり、風流温藉、尤愛す可しと爲す、即事に云ふ、幽齋讀書罷み、靜に嘯きて、烏紗を岸す、遙に見る前邨の暮るゝを、歸牛稻花を渡る、滋賀懷古に云ふ、湖水悠悠々、王氣空し、禁城陳迹、浦雲の中、山花は解せず、前朝の恨、舊に依りて香を飛ばす、轡路の風、靜亡に云ふ、琴屋人なく、漏滴遅し、空牀臥語す、斷腸の詞、海棠枝上三更の月、卻て似たり、昔年雙照の時、秋夜琴を彈するに云ふ、醉て、篋琴を把て、獨自ら彈す、古松風定まりて、夜

亡云、琴屋無人漏滴遲、空牀臥誦斷腸詞、海棠枝上三更月、卻似昔年雙照時、(不載、滋賀復古傳亡)

(二) 秋夜彈琴云、醉把焦琴獨自彈、古松風

定夜方闌、朱弦一曲千秋淚、回首西山落月

寒、江君錫收其病中作、入之詩選、一字一淚、

(無此四字) 實肺腑中之語也、伯揚事迹、具於釋誌、明行狀、野公臺墓誌

賢言、不

晚學而知于世者、江君錫、僧無隱、夙成而不

殞厥問者、祇南海梁蛻富、南國華、無隱三十

而始學詩、且有道德云、南海夙成在口碑、久

矣、蛻富年十二、披髮而爲儒者、國華年十三、

(年下有) 從父來于江都、(江作) 賦東天台五言

古風二百句、膾炙人口、真奇才也、孫管聞北海

書、亦可謂晚學、故探入、柚木太玄北海詩鈔序文云、先生本姓伊藤氏、龍洲先生之次子、以其異氏

方に闕なり、朱弦一曲千秋の涙、首を回せば西山落月寒し、江君錫其病中作を收め之れを詩選に入る、一字一淚、實に肺腑中の語なり、伯揚の事迹、釋誌明の行狀、野公臺墓誌銘に具す、因て賢言せず。

晚學にして世に知らるゝ者は、江君錫、僧無隱、夙成にして厥問を殞さざる者は、祇南海梁蛻富、南國華、無隱三十にして始めて詩を學び、且道德ありと云ふ、南海の夙成口碑に在る久し、蛻富年十二、披髮して儒者と爲る、國華年十三、父に従ひ江都に來る、東天台五言古風二百句を賦す、人口に膾炙す、眞の奇才なり、孫管て聞く北海二十に亦晚學と謂ふべし、故に探入す、柚木太玄の北海詩鈔の序文に云ふ、先生本姓は伊藤氏、龍洲先生の次子、其異氏、播の赤石に在るを以て、先生少時數、其地に遊ぶ、頗武藝に習ふ、而して赤石文學梁蛻富一見之れを奇とし、先生を諭して曰、伊藤氏は西京の儒宗、子の才を以て、何ぞ其道に由るなきや、先生大に其言を然りとし、京に還り、心を典籍に潛め、精を鉛槧に屬して、終夜倦

石文學梁岫嵩一見奇之、隨先生曰伊藤氏西京
 備宗以子之才何莫由其道也先生大然其言還
 京潛心典籍、屬精鉛槧晝夜無倦四年學成與令
 兄君夏先生令弟君錦先生、雙雙並
 高世程之伊藤氏三珠樹(無此注)

大地昌言、夙有神童之稱、年十三、有壽白石
 先生七言律詩、土孝平亦十四、有壽白石律
 詩、共見熙朝文苑附詩、土詩云、絳帳迎春淑
 景融、瑞烟籠日曉、光紅、攝衣已立三年雪、
 負笈新承二月風、晉代賜書皇甫諱、漢家議
 禮叔孫通、群賢齊獻南山壽、正使大名傳、不
 窮、昌言詩云、武昌柳色映春臺、坐上迎賓清
 興催、日暖金桃臨徑發、微風青鳥近筵來、樽
 前長對千秋嶺、花下頻傾萬壽杯、獨步詩名
 人不及、高歌一曲見豪才、以昌言比土氏、固
 非其敵、而文苑不著姓、字履歷、不知土氏果

むなし、四年學成り令兄君夏先生、令弟君錦先生と、
 聲譽並に高く、世に之れを伊藤氏の三珠樹と稱す。

大地昌言、夙に神童の稱あり、年十三、白石先生を壽する
 七言律の詩あり、土孝平亦十四、白石を壽する律詩あり、
 共に熙朝文苑附詩に見えたり、土の詩に云ふ、絳帳春を
 迎へて淑景融り、瑞烟日を籠めて曙光紅なり、衣を攝け
 て已に立つ三年の雪、笈を負ふ丁新に承く二月の風、晉
 代書を賜ふ皇甫諱、漢家禮を讓す叔孫通、群賢齊く獻
 す南山の壽、正に大名をして不窮に傳へしむと、昌言の
 詩に云ふ、武昌の柳色春臺に映ず、坐上賓を迎へて清興
 催す、日暖にして金桃徑に臨んで發き、微にして青鳥
 筵に近づき來る、樽前長く對す千秋の嶺、花下頻に傾く
 萬壽の杯、獨歩の詩名人及ばず、高歌一曲豪才を見ると、
 昌言を以て土氏に比するに固より其敵に非ず、而も文苑
 に姓字履歷を著せず、土氏の果して何人たるやを知らず、
 深く遺憾と爲す、後、魯雲集を閱するに、云ふ、土肥元成、字
 は允仲、其姓は平、霞洲と號す、東武の人、允仲生れて聰悟、

爲何人深爲遺恨、後閱停雲集、云、土肥元成、字允仲、其姓平、號霞洲、東武人、允仲生而聰悟、及其能言、授書卽成誦、六歲賦詩、常山義公觀以爲奇、文廟潛邸之日、召對講以論語中庸等書論辯甚明、且大書其所賦詩、筆勢遒勁、于時年十一、元祿癸未秋八月也、乃命爲侍讀、由是觀之、孝平爲允仲之通稱、亦未可知也、嗚呼寸松雖嫩、已有凌雲之氣、宜其有盛名于世矣、昌言賀府人、室師禮之甥云、補世知蒼麟嶼十二爲博士、而不知土肥允仲十一爲侍讀、蓋麟嶼英妙之資、加以物徂徠之揄揚、其徒之爲曹丘生者不尠矣、因之聲名煥赫于一時、如其學術、予未有考、若夫著作、固不能當允仲國華之一臂力、閑散餘錄

其能く言ふに及び、書を授ければ卽誦を成す、六歳にして詩を賦す、常山義公觀て以て奇と爲し、文廟潛邸の日、召對し、講ぜしむるに論語中庸等の書を以てす、論辯甚明なり、且其賦する所の詩を大書す、筆勢遒勁時に年十一、元祿癸未秋八月なり、乃命して侍讀と爲すと、是れに由りて之れを觀れば、孝平は允仲の通稱たるや、亦未だ知るべからず、嗚呼寸松は嫩と雖、已に凌雲の氣あり、宜なり其世に盛名あることや、昌言は賀府の人、室師禮の甥と云ふ〔補〕

世、蒼麟嶼十二にして博士と爲るを知りて、土肥允中十一にして侍讀と爲るを知らず、蓋、麟嶼英妙の資、加ふるに物徂徠の揄揚を以てし、其徒の曹丘生たる者、尠からず、之に因て聲名一時に煥赫たり、其學術の如き、予未だ考ふるあらず、若夫著作は、固より允仲、國華の一臂の力に當る能はず、閑散餘錄に五言絕句四首を載す平々のみ。

載五言絕句四首、平平耳、(平上有亦字、此句下分注日本名家詩選、有麟嶼五絕一首、不甚佳、矣十七字。)

熙朝文苑、選次不倫、且所其著錄、作者名氏、或名或字、或號或稱、某氏之類、雜錯無義例、中稱雍丘者、卽土肥允仲也、夢澤氏之鹵莽、一何至于此、(補)

文苑卷末附載夢澤氏詩若干、鴈宕宅集云、主人高臥意如何、興滿尋常酒若河、贈養甫云、憐子敝貂處處穿、醉來用盡阮家錢、寄入江若水道人云、高臥若君堪養病、無心問世上如何、自運已如此、其所揀擇、亦可知而已、(補)千村諸成字伯就、夢澤長子、詩史云、字力之、蓋其初字也、詩史摘崑玉集所載、以爲天授才敏、大逾乃翁、予更就自適園集中、摘其佳

熙朝文苑選次倫ならず、且其著錄する所、作者名氏、或は名、或は字、或は號、或は某氏と稱するの類、雜錯にして義例なし、中に雍丘と稱する者、卽ち土肥允仲なり、夢澤氏の鹵莽、一に何ぞ此に至るや、(補)

文苑卷末夢澤氏の詩若干を附載す、鴈宕宅集に云ふ、主人高臥意如何、興滿ちて尋常酒河の若し、養甫に贈るに云ふ、憐む子が敝貂處處穿つ、醉來用ひ盡す阮家の錢と、入江若水道人に寄するに云ふ、高臥君の若きは病を養ふに堪へたり、心に世上の如何を問ふ無し、自運已に此の如し、其揀擇する所、亦知る可きのみ、(補)

千村諸成、字は伯就、夢澤の長子、詩史に云ふ、字は力之、蓋其初めの字なり、詩史に崑玉集に載する所を摘す、以爲へらく天授才敏、大に乃翁に逾ゆと、予更に自適園集中に就て、其佳句を摘す、實に乃翁の及ばざる所なり、五言

句實乃翁之所不及也、五言云、涼夜風篔影、
秋城月柝聲、七言云、推窗影落疎桐月、煮茗
聲寒萬竹風、疎松影動微風夕、細艸烟浮宿
雨餘、張三影之後、又有之子、張三影即張子野〔補〕

伯就悼林生云、且憶茂陵秋雨後、文君壚上
一燈孤、自注云、林生酒家、結句因云、予云、壚
酒區也、相如今、文君當壚于臨邛者、特招王
孫之憐、一策而已、豈於臥茂陵之時、尙使諸
當壚乎、可謂牽強。〔補〕

平戸白石榮、字子春、著桃花洞遺稿二卷、子
春來于江都、執謁江子實、頗善文辭、其學主
經濟、於經義亦有見解、實一奇士也、與龜井
道載爲友、酬道載云、白頭吟、就人何處、四壁
依然司馬樓、樓字爲韻所牽、故致此孟浪、要

に云ふ、涼夜風篔の影、秋城月柝の聲」と、七言に云ふ、窓
を推せば影は落つ疎桐の月、茗を煮れば聲は寒し萬竹
の風、疎松影は動く微風の夕、細草烟は浮ぶ宿雨の餘
と、張三影の後、又之の子あり、張三影は即ち張子野〔補〕

伯就林生を悼むに云ふ、且憶ふ茂陵秋雨の後、文君壚上
一燈孤なり、自注に云ふ、林生は酒家なり、結句因りて云
ふと予云ふ、壚は酒區なり、相如今君をして壚に臨邛に
當らしむる者、特に王孫の憐を招くの一策のみ、豈茂陵
に臥するの時に於て、尙ほ諸をして壚に當らしめんや、
牽強と謂ふ可し。〔補〕

平戸の白石榮、字は子春、桃花洞遺稿二卷を著す、子春、江
都に來り謁を江子實に執る、頗る文辭を善くす、其學、經濟
を主とす、經義に於て亦見解あり、實に一奇士なり、龜井
道載と友たり、道載に酬ひて云ふ、白頭吟、就人何れの
處ぞ、四壁依然たり司馬の樓、樓の字韻に牽るゝが故に
此の孟浪を致す、之れを要するに詩は長ずる所に非ざる
に似たり、況んや、其七言律も亦僅々三四首、眞に管中の

之詩似非所長、況其七言律亦僅僅三四首、眞管中一斑、不足盡全豹耳、所著有老子後傳云、然人無知之、(焉、之、作)不知遐陬絕境之士、終身苦學而不免與草木同朽者、殆鮮矣、噫、

子春絕句間、有可傳者、和贈屈泉如種菊作云、東籬春雨後、種菊主人家、我本轉蓬客、何期九月花、薄香詞云、不欲生男兒、生女愛如璧、男長僅打魚、女長多留客、柳窟詞地在東河下肥地、云、朝看長河水、昏看長河水、河水朝昏綠、郎懷定何似、藹然有古意。

服子遷初稱入江幸八、江子實亦稱入江幸八。

稱玉山者二人、一肥後秋儀字子羽、著玉山集前後篇、一薩藩人、著梅菊各百咏者、出東

一斑にして、全豹を盡すに足らざるのみ、著す所老子後傳ありと云ふ、然れども人之れを知るなし、知らず遐陬絕境之士、終身苦學して草木と同じく朽つるを免れざる者、殆鮮し、噫、

子春の絶句間、傳ふべき者あり、屈泉如が菊を種うる作に和贈するに云ふ、東籬春雨の後、菊を種う主人の家、我は本と轉蓬の客、何ぞ期せん九月の花、薄香詞に云ふ、男兒を生むを欲せず、女を生まば愛、璧の如し、男長じて僅に魚を打し、女長じて多く客を留む、柳窟詞地は東肥河下にありに云ふ、朝に看る長河の水、昏に看る長河の水、河水朝昏綠なり、郎の懷定めて何似、と藹然として古意あり。

服子遷初め入江幸八と稱す、江子實も亦入江幸八と稱す。

玉山と稱する者二人、一は肥後の秋儀字は子羽、玉山集前後篇を著す、一は薩藩の人、梅菊各百咏を著す者、東臣

匡文集。

昨非稿者、東匡也、昨非集者、僧梅莊詩鈔也、
松秀雲、赤松勳之集、(之上)有(子)字、共名、敵菴集。

江忠固號南溟、山根泰德亦號南溟、共有集
三卷、泰德字有鄰、子濯次子、有病革詩云、病
骨從來厭世氛、幽明一路忽將分、自今欲借
仙禽翼、遠擊蓬瀛萬里雲、赤穗赤松鴻易簣、
云、一謫人間八十年、今朝數盡再歸天、夜來
試向雲端望、猶有光芒映斗邊、此老豪氣至
死不除、(此下有入所)、余特愛石仲車、(名有、鶴山、鎮西)、辭世云、(作、獨、辭、世、)、玉皇使者自風流、
四十七年花月遊、今日朝天餘一恨、主恩海
嶽未曾酬、風雅之情、忠厚之志、隱然形見於
言外、比之前二作、固有逕庭。

文集に出づ。

昨非稿とは、東匡なり、昨非集とは僧梅莊の詩鈔なり、松
秀雲、赤松勳の集、共に敵菴集と名く。

江忠固、南溟と號す、山根泰德も亦南溟と號す、共に集三
卷あり、泰德字は有鄰、子濯の次子、病革の詩あり、云ふ、
「病骨從來世氛を厭ふ、幽明一路忽將に分れんとす、自今
仙禽の翼を借りて、遠く蓬瀛萬里の雲を攀たんと欲す」、
赤穗の赤松鴻の易簣に云ふ、「一謫人間八十年、今朝數盡
きて再び天に歸る、夜來試に雲端に向つて望めば、猶光
芒の斗邊に映するあり、此老豪氣死に至るまで除かず、
余特に石仲車(名は有、鶴山と、鎮西の人、)、辭世を愛す、云ふ、「玉皇の
使者自ら風流、四十七年花月の遊、今日天に朝して一恨
を餘す、主恩海嶽未だ曾て酬ひず、風雅の情、忠厚の志、隱
然言外に形見す、之れを前二作に比すれば、固より逕庭
あり。

横尾文介號紫洋、有臨刑詩云、誰憐五十一
 春秋、埋去烟嵐深處丘、不遑青雲平日志、空
 餘身後有吳鉤、又有過田代驛、西歸何面目、
 千里檻車中、忽過田代驛、懷君啼淚紅、驛有
 故人、故未句及之、文介佐賀侯臣、有犯其
 國禁、因被刑云、初來東都居城南赤羽、以舌
 耕爲業、頗有從學之士、痛矣哉、不得其死、然〔補〕
 細合半齋名離字麗王號斗南、蕉中禪師懷
 麗王詩、憶昨周旋權貴客、稱君北斗以南人、
 自注、麗王號斗南、朝鮮成士執嘗向、余稱、合
 生北斗以南一人、麗王聲價高於一時、然其
 所作殊無可誦者、余藏京遊別志一卷、無一
 詩佳者、小草初篋所載、〔小上有、唯字、〕同文律詩
 三首、稍足償聲價。

辨聲詩話下卷

横尾文介紫洋と號す、刑に臨む詩あり、云ふ、誰か憐む五
 十一春秋、埋め去る烟嵐深き處の丘、青雲平日の志を遂
 げず、空しく餘す身後に吳鉤あり、と、又、田代驛を過ぐる
 あり、西歸何の面目ぞ、千里檻車の中、忽ち田代驛を過ぎ、
 君を懷ふて啼淚紅なり、と、驛に故人あり、故に末句之に
 及ぶ、文介、佐賀侯の臣、其國禁を犯すあり、因りて刑せら
 るゝと云ふ、初め東都に來り、城南赤羽に居り、舌耕を以
 て業と爲す、頗る從學の士あり、痛ましひかな、其死を得ざ
 ること然り、〔補〕

細合半齋名は離字は麗王、斗南と號す、蕉中禪師の麗王
 を懷ふの詩に「憶ふ昨周旋す權貴の客、君を稱す北斗以
 南の人、自注に、麗王、斗南と號す、朝鮮の成士執嘗て余に
 向つて稱す、合生は北斗以南の一人と麗王の聲價一時
 に高し、然れども其作る所殊に誦すべき者なし、余、京遊
 別志一卷を藏す、一詩の佳なる者なし、小草初篋に載す
 る所、同文律詩三首稍し聲價を償ふに足る。

祇南海、一日百首、實無一句雷同者、唯銀箭
莫相催、虬箭無相催、二句相干而已、可見胸
中所蘊、不啻一百首。

南海再作一日百首、時原玄輔場白玉二人
擇題、白玉號金山、諸選不錄、白玉詩、事迹遂
不可考、要之與木門諸彦周旋于藝苑、(彦作)
定不碌碌者。

長篇室滄浪爲第一、有贈韓人二百二十韻
(此下有本邦禮與以來)其(其下有)長律如五十
(所未曾有也十一字)其(餘字)韻百韻、往往見其集中、(此下有、南園亦年十九
百韻、十)或云、柳川三省嘗以二百韻律詩贈
韓人、未知然否。

詩史云、或問余曰、子極稱白石、詩至白石、蔑
以加乎、曰、非也、如天授誠蔑以加矣、(授、作、受、下同)

祇南海の一日百首、實に一句の雷同する者なし、唯銀箭
相催す莫かれ、虬箭相催す無かれ、の二句相干すのみ
見るべし、胸中の蘊む所、啻に一百首のみならざるを。

南海再び一日百首を作る、時に原玄輔場白玉の二人
題を擇ぶ、白玉、金山と號す、諸選、白玉の詩を録せず、事迹
遂に考ふべからず、之れを要するに木門の諸彦と藝苑に
周旋す、定めて碌々たる者にあらず。

長篇は室滄浪を第一と爲す、韓人に贈る二百二十韻あり、
其長律五十韻百韻の如き、往々其集中に見ゆ、或は云ふ、
柳川三省、嘗て二百韻律詩を以て韓人に贈ると、未だ
然るや否やを知らず。

詩史に云ふ、或ひと余に問ふて曰、子極めて白石を稱す、
詩は白石に至りて、以て加ふるなきか、曰、非なり、天授の

若夫揣摩鍛鍊、尙有可論、要之天授之富、吐
言成章、往往不遑思釋、是以疵瑕亦復不鮮、
亡友島田櫟齋嘗語余曰(無田字)白石先生天
才超凡、猶不厭改竄(猶上有然字)某得見其詩
艸一卷、再四塗抹、終無初作、君錫之言恐非、

(君錫之言恐非、作君錫傳聞之誤)

又云白石送人之長安絕句云、紅亭綠酒畫
橋西、柳色青青送馬蹄、君到長安花自落、春
山一路杜鵑啼、四句中二句全用唐詩、夫剽
竊詩律所戒、而鍊丹成金、猶可言、以鉛刀代
鑊、鄧將之何謂、草色青青送馬蹄、本臨岐妙
語、草色送馬蹄、言春艸承馬蹄、以柳代草、蹄
字無著落、殊爲減價(此下有云二字)余云、馬蹄猶
曰馬行(無字)言無到處不春色也、是深春景

繁華詩話下卷

如きは誠に以て加ふる蔑し、若し夫れ揣摩鍛鍊、尙は論
ず可き有り、之れを要するに、天授の富、言を吐て章を爲
す、往々思釋するに遑あらず、是を以て疵瑕亦復鮮から
ず、亡友島田櫟齋嘗て余に語て曰、白石先生、天才超凡、猶
改竄を厭はず、某其詩草一卷を見るを得たり、再四塗抹、
終に初作無しと、君錫の言恐くは非ならん。

又云ふ、白石、人の長安に之くを送る絶句に云ふ、紅亭綠
酒畫橋の西、柳色青青馬蹄を送る、君長安に到らば花自
ら落ち、春山一路杜鵑啼、四句中二句全く唐詩を用ふ、
夫れ剽竊は詩律の戒むる所、而かも丹を鍊りて金と成さ
ば、猶言ふ可し、鉛刀を以て鑊に代ふ、將た之れ何とか
謂はん、草色青青馬蹄を送る、本、臨岐の妙語、草色馬蹄
を送るとは、春草馬蹄を承るを言ふ、柳を以て草に代へ、
蹄の字著落なし、殊に價を減すと爲す、余云ふ、馬蹄は猶
馬行と曰ふがごとし、言ふは到る處春色ならざるなきなり、
是れ深春の景致、第三句の張本と爲す者、著落無しと
謂ふべからず、若し夫れ采蓮曲に云ふ、紅粉青蛾素舸を

四五

致、爲第三句張本者、不可謂無著落矣。若夫采蓮曲云、紅粉青蛾照素柯、南風吹起采蓮歌、下句實明人警拔(此下有目往)代斷以起、似覺劣弱、然亦(此下有千百中)白璧蠅矢、固應無損其價。

儉詩有三、儉其語者爲之下、白石、老少年行云、君不見東家阿嬌年七十、夜來向市買燕脂、南海、老矣行云、東鄰妖嬈尙效顰、夜買燕脂佩鷄舌、白石送春云、歸意蘼蕪綠、離情芍藥紅、北海春江花月歌云、離情寂寞蘼蕪綠、愁心生憎芍藥紅、二子以詩鳴者、(作二子詩、名所人知)猶且如此、況其他乎。

蛻嵩賦得春帆細雨來云、東風十里烟波黑、楚竹湘山不可知、清君錦雪夜泊舟云、中宵聊試

照す、南風吹き起す采蓮の歌、下句實に明人の警拔、斷に代るに起を以てす、劣弱を覺ゆるに似たり、然れども亦白璧の蠅矢、固より應に其價を損する無かるべし。

詩を儉む三あり、其語を儉む者、之れを下と爲す、白石の老少年行に云ふ「君見すや東家の阿嬌年七十、夜來市に向つて燕脂を買ふ」、南海の老矣行に云ふ「東鄰の妖嬈尙、顰に效ひ、夜騰脂を以て鷄舌を佩ぶ」、白石の春を送るに云ふ「歸意蘼蕪綠に、離情芍藥紅なり」、北海の春江花月の歌に云ふ「離情寂寞蘼蕪綠に、愁心生憎や芍藥紅なり」、二子詩を以て鳴る者なり、猶且ほ此の如し、況んや其他をや。

蛻嵩春帆細雨來るを賦し得たり、云ふ、「春風十里烟波黒し、楚竹湘山知るべからず、清君錦の雪夜泊舟に云ふ、中

推、篷望、楚竹湘山不可知、是亦生吞郭正一也。
 室鳩巢春日思親云、(鳩巢作師禮下同)憶昨辭家行
 役時、春來秋去欲歸遲、朝朝陟屺兒悲母、暮
 暮倚閭母泣兒、豈謂彩衣爲素服、忽將死別
 變生離、泰山如礪河如帶、此恨綿綿無盡期、
 全首剽竊許魯齋思親詩於名家最可愧矣、
 許氏七月望日思親云、(無於名家至思親十五字)將謂百
 年供色養、豈期一日變生離、泰山爲礪終磨
 盡、此恨綿綿未易衰、又九日思親云、兒望母
 時兒哭、母尋兒處母啼兒、夫訟襲、古人有
 之、雖老杜大蘇猶不能免焉、或有述者卻過
 作者、在爲之如何耳、若夫王元之暗合杜語、
 地位已逼、不足深怪、鳩巢此作、步步摸寫、形
 迹出露、(出露二字互易)亦不可謂暗合、況結語全

宵聊試に篷を推して望む、楚竹湘山知るべからず」と、是れ亦生吞の郭正一なり。

室鳩巢の春日親を思ふに云ふ「憶ふ昨家を辭して行役の時、春來り秋去りて歸らんと欲する遅し、朝々屺に陟りて兒は母を悲しむ、暮々閭に倚りて母は兒に泣く、豈謂はんや彩衣素服と爲り、忽死別を將て生離に變山礪の如く河帶の如くなるも、此恨綿々盡る期なし、全首許す、泰魯齋親を思ふ詩を剽竊す、名家に於て最愧つべし、許氏七月望日親を思ふに云ふ「將に謂はんとす百年色養に供す、豈期せんや一日生離に變ず、泰山礪と爲り終に磨し盡すも、此恨綿々未だ衰へ易からず」と、又九日親を思ふに云ふ「兒母を望む時兒、母を哭す、母兒を尋る處母、兒に啼く」と、夫れ沿襲は古人之れあり、老杜大蘇と雖猶免るゝ能はず、或は述者の卻て作者に過ぐるあり、之れを爲す如何に在るのみ、若し夫れ王元之杜語に暗合する、地位已に逼る、深く怪むに足らず、鳩巢此の作、歩々摸寫、形迹出露す、亦暗合と謂ふ可からず、況んや結語全く白傳の語を用ふ、未だ鳩巢の意思如何を知らず。

用白傳之語(用、作)未知鳩巢意思如何。

趙師秀有句云、麥天晨氣潤、槐夏午陰清、鳩巢賦得首夏猶清和云、(鳩巢、作師、禮、無得字)麥畦晨氣潤、竹徑野涼微、已爲可咲、晚近田叔明田家夏興云、麥秋晨雨潤、槐夏午風涼、不堪絕倒、眞鈍賊也。

物徂來暮雨送人云、陌頭楊柳垂、相送雨昏時、寂寂去人遠、濛濛匹馬遲、江聲鐘易濕、浦色艸應滋、寧問明朝後、吾心已亂絲、韋蘇州賦得暮雨送李胄云、楚江微雨裏、建業暮鐘時、漠漠帆來重、冥冥鳥去遲、海門深不見、浦樹遠含滋、相送情無限、沾襟比散絲、(散、作、風)二篇語意酷似、(作、二篇語意、何其相似)

松霞沼青樓曲云、歌罷不語還、不咲、千恨萬

趙師秀句あり云ふ、麥天晨氣潤ふ、槐夏午陰清し、鳩巢首夏猶清和を賦し得たりとに云ふ、麥畦晨氣潤ふ、竹徑野涼微なり、已に咲ふ可しと爲す、晚近田叔明の田家夏興に云ふ、麥秋晨雨潤ふ、槐夏午風涼し、と、絶倒に堪へず、眞の鈍賊なり。

物徂徠、暮雨人を送るに云ふ、陌頭楊柳垂る、相送る雨の昏き時、寂々去人遠く、濛々匹馬遅し、江聲鐘濕ひ易く、浦色艸應に滋なるべし、寧ぞ問はん明朝の後を、吾心已に亂絲、韋蘇州、暮雨を賦し得て李胄を送るに云ふ、楚江微雨の裏、建業暮鐘の時、漠々帆來る重く、冥々鳥去る遲し、海門深くして見えず、浦樹遠く滋を含む、相送りて情限りなし、襟を沾ほして散絲に比す、と、二篇語意酷だ似たり。

松霞沼の青樓曲に云ふ、歌い罷んで語らさ還た咲はず、

恨在翠蛾、祇南海評云、無祇字、此下有結句、千古絕唱六字、君謂千恨萬恨在翠蛾、瑜謂千恨萬恨在兩句、余云、霞沼結語、全用武元衡萬恨在蛾眉、劣增二字耳、(作續增二字)、南海遽以爲千古絕唱何、(如下有)

霞沼寄南海長篇落句云、(無云)、出門長唉海

天碧、亦用黃太史、出門一唉大江橫。

詩有意與相得語意全同者、亦非剽竊、南郭草堂春興云、自忘雙鬢短、復對百花新、赤松滄洲、春日偶題云、遂忘雙鬢白、更對百花紅、是也。

往年余在秩山、乘月散步、樹聲索索、犬吠寥寥、偶得一聯云、犬吠孤邨月、人行深樹風、自以爲佳、(佳、作得)、後讀松浦集云、犬吠孤村月、

養齋詩話下卷

千恨萬恨翠蛾に在り、祇南海の評に云ふ、君は千恨萬恨翠蛾に在りと謂ふ、瑜は千恨萬恨兩句に在りと謂と、余云ふ、霞沼結語、全く武元衡の「萬恨蛾眉に在り」を用ひて、劣に二字を増すのみ、南海遽に以て千古の絕唱と爲すは何ぞや。

霞沼南海に寄する長篇の落句に云ふ、「門を出で、長唉す海天碧なり」、亦黃太史の「門を出で、一唉大江横ふ」を用ふ。

詩に意與相得て語意全く同じき者あり、亦剽竊に非ず、南郭の草堂春興に云ふ、「自ら忘る雙鬢の短きを、復對す百花の新なるに、赤松滄洲の春日偶題に云ふ、遂に忘る雙鬢の白きを、更に對す百花の紅、是なり。

往年余秩山に在り、月に乘じて散歩す、樹聲索々、犬吠寥寥、偶一聯を得たり、云ふ、「犬は吠ゆ孤邨の月、人は行く深樹の風、自ら以て桂と爲す、後松浦集を讀むに云ふ、「犬は吠ゆ孤村の月、燈は明なり兩岸の樓」と、遂に前句を改

燈明兩岸樓、遂欲改前句、思意未屬、又讀巖桐集云、犬吠孤村月、鴈過高漢雲、余因以爲意境之同、冥契暗合、置而不改。

安藤子立語予云、下總州生實者、我侯國初已來國之有、重俊院、實先侯重俊公所創造也、關上望士峯、願爲佳境、有一丐僧、來請宿、住持某、惡其形狀、不肯許、一沙彌聞之、竊宿於關上、詰旦辭去、題小詩于壁上、有言云、海嶠山寺海嶠隈、落日三竿鳥不回、看取芙蓉千似雪、恩光一夜自崔嵬、不知所之。〔補〕

邵氏聞見前錄、大學博士姜愚字子發、京師人、學康節、登進士第、月分半俸奉康節云、朱舜水投化、初居崎陽、坎壤一甚、〔一作尤、且此下有食不支夕〕安東省菴柳川人、食祿二百石、聞舜

めんと欲す、思意未だ屬せず、又巖桐集を讀むに云ふ、犬は吠ゆ孤村の月、鴈は過ぐ高漢の雲、余因て以爲へらく、意興の同じき、契冥暗合すと、置いて改めず。

安藤子立、予に語けて云ふ、下總州生實なる者、我侯國初已來國の有、重俊院は實に先侯重俊公の創造する所なり、關上士峯を望む、願佳境と爲す、一丐僧有り、來りて宿を請ふ、住持某其形狀を惡み、肯て許さず、一沙彌之れを憫み、竊に關上に宿せしむ、詰旦辭し去る、小詩を壁上に題す、言へるあり、云ふ、海嶠山寺海嶠の隈、落日三竿鳥回へらず、看取す芙蓉千仞の雪、恩光一夜自ら崔嵬と、之く所を知らず。〔補〕

邵氏聞見前錄に、大學博士姜愚字は子發、京師の人、康節に學び、進士の第に登る、月に半俸を分ち、康節に奉ずと云ふ、朱舜水投化し、初め崎陽に居る、坎壤一に甚し、安東省菴は柳川の人、祿二百石を食む、舜水の轍を聞き、其祿の半を分ち、柴米の實と爲すと、二事相似たり、此に附載

水義分其祿半、爲柴米之資、二事相似、附載于此。

田鶴樓師事白石先生(無先生二姓下先生先生作白石)先生沒後、自矢不復執謁于他人、與陳后山賦、妾薄命不見他師、亦甚相類、如省菴鶴樓、可謂勇於義者也、省菴詩見扶桑名賢詩集、感春云、往事悠悠心不平、春來春去兩傷情、釀愁嫩柳著烟重、流恨飛花逐水輕、梁上尋巢忙燕子、池邊添雨噪蛙聲、踈慵無意尋鉛槧、多少風光欠品評、省菴有子名守直、字元簡、有詩才、亦見名賢詩集及千家詩(無亦字)、雪云、騎光透籬幙、助月映書車、早行云、野渡星初落、斷橋露未乾(此下有爭悼好曾公孺人、落句云、自是湘江碧波瀾、不知何處弄琴絃之)池端晚眺云(絕句、作)、杖藜行盡叡山邊、處

齊春詩話下、卷

田鶴樓、白石先生に師事す、先生沒後、自ら矢つて復謁を他人に執らず、陳后山の賦に、妾薄命他師に見えずと、亦其相類す、省菴、鶴樓の如き義に勇なる者と謂ふべきなり、省菴の詩、扶桑名賢詩集に見ゆ、感春に云ふ、往事悠悠心平ならず、春來り春去りて兩ながら情を傷ましむ、愁を釀す、嫩柳烟を著けて重く、恨を流す、飛花水を逐ふて輕し、梁上巢を尋ねて燕子忙く、池邊雨を添へて蛙聲噪し、踈慵鉛槧を尋ぬるに意なし、多少の風光品評を欠く、省菴子あり、名は守直、字は元簡、詩才あり、亦名賢詩集及び千家詩に見ゆ、雪に云ふ、騎光籬幙に透る、月を助けて書車に映す、早行に云ふ、野渡星初めて落ち、斷橋露未だ乾かず、池端晚眺に云ふ、杖藜行き盡す叡山の邊、處々の烟盤暮れんと欲する天、遊客試に窮む千里の眼、快風吹き斷ふ滿池の蓮、省菴子ある此の如し、實に積善の餘慶なり。

處烟雲欲暮天、遊客試窮千里眼、快風吹斷
滿池蓮、省菴有子如此、實積善之餘慶也。

秋玉山有春宵觀祕戲圖引、(引作)雖一時
之戲語、逐句用事、穩貼自在、莫見其安排、
湊之迹、天下之奇才也、(無之)爲言之醜、不附
于此。

紀平洲、觀平氏西敗圖歌行、十八歲作云、俊
爽奇拔、近世不見其比。

日本名家詩選所載土昌英品川樓詩、尤淺
劣、不足收錄。(補)

秋玉山、少時嘗在國學、豪放不羈、日遊酒樓
妓館、不復事文墨、書籍衣裘、(其作)竝爲鳥
有、當夏無蚊、唯衣籠、因穿一邊帖之紗
縠、常臥其中、有鄰舍生讀班史、玉山在中聞

秋玉山の春宵秘戲の圖を觀る引あり、一時の戲語と雖、
句を逐ふて事を引ひ、穩貼自在、其安排、湊の迹を見る
莫し、天下の奇才なり、言の醜なるが爲に此に附せず。

紀平洲、平氏西敗圖を觀る歌行は、十八歳の作と云ふ、俊
爽奇拔、近世其比を見ず。

日本名家詩選、載する所、土昌英、品川樓の詩、尤淺劣にし
て收録するに足らず。(補)

秋玉山、少時嘗て國學に在り、豪放不羈、日に酒樓妓館
に遊び、復文墨を事とせず、書籍衣裘、竝に鳥有と爲る、夏
に當りて蚊、無し、唯衣籠有り、因て一邊を穿ら、之れに
紗縠を帖し、常に其中に臥す、鄰舍生あり、班史を讀む、玉
山中に在りて、之れを聞く、鄰舍生其衣籠中に臥するを知

之鄰舍生知其臥于衣籠中、一日戲之曰、久不聞子讀書聲、不知夜來讀何書、答曰、讀班史耳、其人云、已讀班史、讀某傳乎、玉山遂誦某傳五六紙、即鄰舍生昨夜所讀也、其強識槩如此。

服仲英本姓中西、開散餘錄、西村誤、名元雄、號白賁、南郭義子也、其詩平淡溫雅、(溫、作)有錢劉之佳致、(此下有東都固、雖人文調、)羽林郎騎射歌、江君錫收之詩選、(詩選上、有)縱使乃父代之、恐不可加、五言律頗爲多、合作、君錫不收之、(此下有詩、)殆爲欠事、天假之年、關東文柄孰能執之、予嘗云、仲英諸作不勤修飾、天性豔華、(天上、有、而)自然發形、(此下有書、之、)自射人語、(自射人語、)今摘其佳句、五言、郊行值雨、回

り、一日之れに戯れて曰、久しく子が讀書の聲を聞かず、知らず夜來何の書を讀む、答へて曰、班史を讀むのみ、其人云ふ、已に班史を讀む、某傳を讀みしかと、玉山遂に某傳五六紙を誦す、即鄰舍生昨夜讀みし所なり、其強識槩ね此の如し。

服仲英、本姓は中西、開散餘錄に、西村に作るは誤なり、名は元雄、白賁と號す、南郭の義子なり、其詩平淡溫雅、錢劉の佳致あり、羽林郎騎射の歌、江君錫之を詩選に收む、縱使ひ乃父之に代るも、恐らくは加ふべからず、五言律頗合作多しと爲す、君錫之れを收めず、殆欠事たり、天之れに年を假さば、關東の文柄孰か能く之れを執らん、予嘗て云ふ、仲英諸作修飾を勤めず、天性豔華、自然に形を發す、今其佳句を摘す、五言、郊行雨に値ふ、回看す、踏音の處、烟は暗し、野橋の西、感春、斷鴻暮雨に迷ひ、芳草天涯に遍し、春日墨水に舟を泛ぶ、水色楊柳を侵す、晴光酒盞に映す、南浦春汎、汀烟細草に蒸し、岸樹垂楊を雜ふ、三家君新に西莊を營む、雜菜秋圃荒れ、孤村午烟冷、十日松園鸞客舍集に、美酒盈尊の興、黃花昨日の秋、金井候の秋後、山縣城樓に登るの作

看踏青處、烟暗野橋西、感春、斷鴻迷暮雨、芳
 艸遍天涯、春日曩水泛舟、水色侵楊柳、晴光
 曠、酒壺、南浦春汎、汀烟蒸細草、岸樹雜垂楊、
 家君新營西莊、雜菜荒秋圃、孤村冷午烟、十
 日松園鸞客舍集、美酒盈尊興、黃花昨日秋、
 奉和金井侯秋後登山縣城樓之作、山城催
 短景、雨雪入殘秋、(此下有送金井侯前途)七
 言、(此下有醉美人、玉柱、謾移)寄江允清、塞北雲
 陰仍雨雪、江東風物已芳菲、墨梅、且懸夜月
 隱隴色、不辨春風南北枝、七言絕句、送人歸
 隱湖南、一片征帆碧水間、湖天何處向鄉關、
 到時應識紅顏老、暮景秋寒石鏡山、奉寄懷
 日出侯、紫海秋光望欲迷、月明千里夜凄凄、
 趨陪誰共扁舟興、苦憶風流謝鎮西、

五四
 に奉和す、山城短景を催す、雨雪殘秋に入る、七言に江允
 清に寄す、塞北の雲陰仍雨雪、江東の風物已に芳菲、墨
 梅、且懸く夜月隴隴の色辨せず春風南北の枝、七言絶句
 に、人の湖南に歸隱するを送る、一片征帆碧水の間湖天
 何の處ぞ郷關に向ふ、到る時應に識るべし紅顔の老ゆ
 るを、暮景秋は寒し石鏡山、日出侯に寄懷し奉る、紫海の
 秋光望み迷はんと欲す、月明千里夜凄々、趨陪誰と共に
 せ、扁舟の興、苦に憶ふ風流の謝鎮西。

南國華伯玉、共翫年善書畫、可謂一社二妙、郡山柳大夫嘗問後素于伯玉云、予觀伯玉書贈白石先生歌行一篇、筆勢雅健、謝康樂不得專美於古矣〔補〕

周南集曰、丁未秋從物先生、泛舟墨水、羣賢皆會、詩酒從容、時余將歸養、乃有一爲參與商、此遊夢中過句、明年先生易簣、數語遂爲永訣之讖〔此下有云云終爲後〕

周南資性謹篤〔篤、作〕物門之徒、希有其比、以故遺澤不斬、多士之選、天下共推、菽府久矣〔辨、以故至久〕其詩雖無跌宕之氣、風流溫雅、亦可見爲君子之人、如弔膝舜政喪偶、及呈朝鮮李東郭七言律〔無言〕尤爲可傳、又馬關弔古云、上皇非不憫、孫帝平氏自爲天下

南國華伯玉、共に翫年にして書畫を善くす、一社二妙と謂ふべし、郡山柳大夫嘗て後素を伯玉に問ふと云ふ、予、伯玉の書、白石先生に贈る歌行一篇を觀るに、筆勢雅健、謝康樂も美を古に專にすることを得ず〔補〕

周南集に曰、丁未の秋、物先生に従ひ、舟を墨水に泛ぶ、羣賢皆會す、詩酒從容時に余將に歸養せんとす、乃一たび參與商と爲り、此遊夢中に過ぐの句あり、明年先生易簣す、數語遂に永訣の讖と爲る。

周南資性謹篤、物門の徒、其比ある希なり、故を以て遺澤斬えず、多士の選、天下共に菽府を推す久し、其詩跌宕の氣無しと雖、風流溫雅、亦君子の人たるを見るべし、膝舜政の偶を喪ふを弔ふ、及び朝鮮の李東郭に呈す七言律の如き、尤傳ふべしと爲す、又馬關弔古に云ふ、上皇、孫帝を憫まざるに非ず、平氏自ら天下の讐たりと、一雙眼と謂ふ可し。

實可謂一隻眼矣。

蛻富先生稱呼辨正序略云、大抵文儒之癖尙雅斥俗、甚者面目眉髮倭、而其心腸乃齊魯焉、燕趙焉、沾沾自喜其勢、不得不削複姓爲單也、忠信愿懇、以道學自任、如中村惕齋亦不免削村爲中、況於餘子乎、詩用地名、鑄俗于雅、陳國稱宛丘、燕京稱長安、雖異方亦然、此方謂武藏爲武昌、播磨爲播陽、管根爲函關、若是類、斧鑿無痕、假用入歌詩可也、目黑稱驪山、染井稱蘇迷、芝門稱司馬門、天滿稱天馬、則小大不倫、名實俱亡、可謂兒戲已、夫改複姓之與革地名、二者亦唯翰墨社是用、殆不與俗士大夫相關、則宜若無咎也、其實蘆祖先素興志、罪莫大焉、余按貝原益軒

蛻富先生の稱呼辨正序の略に云ふ、大抵文儒の癖雅を尙んで俗を斥く、甚きは面目眉髮は倭而して其心腸は乃齊魯なり、燕趙なり、沾々自ら喜ぶ、其勢複姓を削りて單と爲さざるを得ず、忠臣愿懇、道學を以て自ら任ずる、中村惕齋の如きも、亦村を削りて中と爲すを免れず、況や餘子に於てをや、詩に地名を用ふ、俗を雅に鑄す、陳國を宛丘と稱し、燕京を長安と稱す、異方と雖亦然り、此方武藏を謂つて、武昌と爲し、播磨を播陽と爲し、管根を函關と爲す、是の如き類、斧鑿痕なし、假用して歌詩に入るゝも可なり、目黒を驪山と稱し、染井を蘇迷と稱し、芝門を司馬門と稱し、天滿を天馬と稱す、則小大不倫、名實俱に亡ぶ、兒戲と謂ふべきのみ、夫れ複姓を改むると、地名を革むると、二者亦唯翰墨社に是れ用ふ、殆俗士大夫と相關せず、宜しく咎むるなきが若くなるべし、其實は祖先を蔑し、興志を棄る、罪焉れより大なるはなしと、余按するに貝原益軒先生も亦嘗て稱呼辨を著す、實に先鞭と爲す、二先生の言痛く時弊に砒し、後學に惠ある勝て言ふべからず、然れども當時徠學大に行はれ勢焔萬丈、二先生教時の心切なりと雖、亦行ふ能はず、清田君錦の蛻

先生亦嘗著稱呼辨、實爲先鞭、二先生之言、痛矻時弊、有惠于後學、不可勝言矣、然當時徠學大行、勝焰萬丈、雖二先生救時之心切、亦不能行、清田君錦之於蛻崑先生、不啻親炙、又從仰其咳唾、猶且削田爲清、將時勢使之乎、甚則改易其姓、曰劉、曰孔、曰諸、葛、不諱之尤、不容先王之誅者也、輒近稍有複姓如小笠原大久保、不肯削之爲大爲原者、嗚呼、二先生之言、雖當世不行、至今爲烈、二先生而有靈、亦可少吐氣云。

唐徐彥伯龍門爲虬戶、金谷爲銑溪、謂之遊體、今詩人(今詩人作當今)鶴岡爲鶴陵、筍根爲函山、品川爲級河、亦遊體之遺志也、自古學者、以文爲戲、有此弊矣。

弊弊詩話下卷

崑先生に於ける、雷親炙するのみならず、又從つて其咳唾を仰ぐ、猶ほ田を削りて清と爲す、將た時勢之をせしむるか、甚しきは則其姓を改易し、劉と曰ひ孔と曰ひ諸葛と曰ふ、不諱の尤、先王之誅に容れられざる者なり、輒近稍、複姓小笠原大久保の如き、肯て之れを削りて大と爲し、原と爲さざる者あり、嗚呼、二先生の言、當世には行はれずと雖、今に至りて烈と爲す、二先生にして靈あらば、亦少しく氣を吐くべしと云ふ。

唐の徐彥伯、龍門を虬戶と爲し、金谷を銑溪と爲す、之れを遊體と謂ふ、今の詩人、鶴岡を鶴陵と爲し、筍根を函山と爲し、品川を級河と爲す、亦遊體の遺意なり、古より學者、文を以て戲と爲す、此弊あり。

之官、又有御史臺不置大夫、以中丞爲長官之時、若夫使異朝人見此詩、大怪笑曰、天子自勅執法貴臣、匹馬夜行、搜索逋亡之妾、仲國時爲彈正大弼、職掌執法、而相當御史中丞、服子欲務雅、其言不意、致是謬誤乎、當時彈正大弼、散官而非見職、天子私命搜逋亡之妾、(稷下有)亦不足怪也、直言彈正大弼、則縱使異朝人見、(無則)彼素不諳本邦官職、(兼作)不爲意必矣、白石南郭諸先生集清估攜歸、謫於其國、不可無遠慮也、此說一出、萬犬吠聲、相牽和之、咏本邦事蹟者、(本上有)直言小督局佛御前、不失事實、是可也、其言鄙俚、將之何謂、先賢單稱小督、或脩爲佛妓、用諸詩辭、孰憂難知、亦索異於人而已、(而已)

夫を置かず、中丞を以て長官と爲すの時あり、若し夫れ異朝の人に此詩を見せしめば、大に怪笑して曰はん、天子自ら執法貴臣に勅し、匹馬夜行逋亡の妾を搜索せしむと、仲國時に彈正大弼たり、職掌執法を掌る、而して御史中丞に相當す、服子務めて其言を雅にせん、と欲し、是の謬語を致すを意はざるか、當時彈正大弼、散官にして見職に非ず、天子私に命じて逋亡の妾を搜さしむ、亦怪むに足らず、彈正大弼と直言すれば、則縱ひ異朝人に見せしむるも、彼素本邦の官職を諳ぜず、意と爲さざる必せ、白石南郭の諸先生の集清估携へ歸り、其國に繋ぐ、遠慮り、無かる可からざるなりと、此說一たび出でて、萬犬吠に吠へ、相牽ひて之れに和す、本邦の事蹟を咏する者、小督局佛御前と直言し、事實を失はず、是れ可なり、其言鄙俚、將た之れを何んと謂はん、先賢單に小督と稱し、或は脩して佛妓と爲し、諸を詩辭に用ふ、孰か知り難きを憂へん、亦異を人に索むるのみ、頃日皇郡名勝集を讀むに、豬飼元博の舟圖の詩あり、云ふ、菜を摘して公卿春宴を設く、と、若し諸を異邦の人に示さば、則必謂はん、身重任に居り、菜蔬を摘するを以て遊戯と爲す、何ぞ其れ鄙なるやと、謂はゆる實川にして詩に書ある者なり、醫子、頼に

在れば則醜と是れなり。

頃日讀皇都名勝集(頃日作)有豬飼元博舟岡詩云摘菜公卿設春宴若示諸異邦人

則必謂身居重任(身下有)以摘菜蔬爲遊戲

(舞菜)何其鄙也所謂實用而害於詩者儻子

在類則醜是也(此下有抑好用本邦典故直如咏國歌矣白石容奇之詩爲可稱贊)

又云予伯氏藏蛻崑先生自書月詩有細竹

馴龙臥喬林羈鳥驚之句後蛻崑集板行喬

林作喬柯意義共勝可見七十老翁潛心藝

文不苟一字(補)

筆記又云梁蛻崑屈景山二先生譽望高于

世不待予言二先生自有絶萬人之德無決

非無遂己無妬才排勝己之人無阿富貴雖

後生末輩之詩文潛心讀之必兩三過此等

後生末輩之詩文潛心讀之必兩三過此等

又云ふ余の伯氏蛻崑先生の自書月の詩を藏す、細竹馴
形臥し喬林羈鳥驚くの句あり、後蛻崑集板行す、喬林を
喬柯に作る、意義共に勝る、見る可し、七十の老翁、心を藝
文に潛め、一字を苟もせざるを、(補)

筆記に又云ふ梁蛻崑屈景山二先生、譽望世に高し、予の
言を待たず、二先生自ら萬人に絶するの徳あり、非を決
する無く、己を遂ぐる無く、才を妬み己に勝れる人を排
する無く、富貴に阿るなし、後生末輩の詩文と雖、心を潛
めて之れを讀む、必兩三過此等固より儒者分上の事と

固雖儒者分上之事能行之者甚少矣、惟此二條固不足盡二先生、亦可見其德量。

藍田東龜年心賦曰(白、作)上國有聖人、德踰乎往號、澤溢乎八荒、嘗製儷語曰、日月燈、江海油、風雷鼓板、天地一大戲場、臣竊觀之、至矣、高矣、不可以尙、儷生其世、幸容余狂此指聖(聖下有入字)即清康熙主也、康熙之語、更有堯舜且湯武末(此下有言二字)備前湯子祥、嘗有言云(白、作)無聖人、侮鬼神、實胡人哉、不可謂過當論也、藍田之言、雖一時激切之所使然、其言大害于事矣、蛟窟先生(先生作翁)和歌古史通序、譏以和歌爲侏儷、以詩爲鳳音者、況生我土、浴昭代之澤(浴、作)以華耕、以心織、四體不勳、五穀不分、而稱臣于異邦、主

雖能く之れを行ふ者甚少し、惟此二條固より二先生を盡くすに足らざるも、亦其德量を見る可し。

藍田東龜年の心賦に曰、上國に聖人有り、徳往號に踰え、澤八阜に溢る、嘗て儷語を製して曰、日月は燈、江海は油、風雷は鼓板、天地は一大戲場と、臣竊に之れを觀るに、至れり高し、以て尙ふ可からず、儷其世に生れは幸に余が狂を容れんと、此に指す聖は即ち清の康熙主なり、康熙の語、更に堯舜は且湯武は末といふあり、備前の湯子祥、嘗て言ふ有り云、聖人を無し、鬼神を侮る、實に胡人なるかと、適當の論と謂ふべからざるなり、藍田の言、一時激切の然らしむる所と雖、其言大に事に害あり、和歌古史通序に、和歌を以て侏儷と爲し、詩を以て鳳音と爲す者を譏る、況や我が土に生れ、昭代の澤に浴し、以て筆耕し、以て心織し、四體勳めず、五穀分たず、臣を異邦の主に稱し、且謂つて聖人と爲す、日出處の天を天とせず、而して日没處の天を天とする者と謂ふ可し、先時物徂徠勉めて高華の語を爲し、而して和習を揉めんと欲し、唐山を崇尊するの甚しき、孔像の贊を作り、日本國夷人物茂卿と稱するに至る、終に識者の譏を免れず、藍田も

且謂爲聖人、可謂不天、日出處之天、而天日
 沒處之天者矣、先時物徂徠、勉欲爲高華語、
 而撓和習、崇尊唐山之甚、(此下有愛其、)作孔
 像贊、至稱日本國夷人物茂、卿終不免、誠者
 之譏、藍田亦徂門之徒、一味崇信徂學、至老
 不易、故有此等之弊也、予也淺學、(淺學、作不、)
 不敢指適先達、(先達、作前人、)聊以寓鑒戒之意
 云、(接此一線在下卷首東澤、
 好用半日、詞字、條之後、)

亦徂門の徒、一味徂學を崇信し、老に至るまで易へず、故
 に此等の弊あるなり、予や淺學、敢て先達を指撻せず、聊
 以て鑒戒の意を寓すと云ふ。

4

弊帚詩話下卷 終

弊帚詩話附錄

芳洲先生口授云、余三十一歲、舟泊勝本浦、夜坐得一聯曰、山近雲生戶、林疎月滿樓、五十歲左右、寄江若水詩、有一聯曰、斷鴻明月峨眉曉、孤鶩長天滕閣秋、七十五歲寫真自讚曰、論文敢向大家覓、鍊句全從小說來、情懂一世、得此三聯、嚮在東藩、作詩出示、荻生茂卿、輒蹙眉而嘆曰、醜醜、可謂知己、

石原鼎庵者、長崎人也、客居東藩、有詩名、詣素堂、有一聯云、晚潮通小竇、夜雨霽高枝、霞沼擊節嘆賞曰、今世只有此一聯、每論詩、必舉以示人、曩日君所言、明月高涼夜、此一句可與石原相敵、霞沼不可起、無以此句相聞、

芳洲先生の口授に云ふ、余三十一歳、舟勝本浦に泊す、夜坐、一聯を得たり、曰、「山は近くして雲戸に生じ、林疎にして月樓に滿つ、」五十歳左右、江若水に寄する詩、一聯あり、曰、「斷鴻明月峨眉の曉、孤鶩長天滕閣の秋、」七十五歳、寫真自讚に曰、「文を論じて敢て大家に向つて見め、句を鍊りて全く小説より來る、」一世に情懂し、此の三聯を得たり、嚮に東藩に在りて、詩を出して荻生茂卿に示す、輒ち眉を蹙めて嘆じて曰、「醜々、知己と謂ふべし、」

石原鼎庵は、長崎の人なり、東藩に客居す、詩名あり、素堂に詣る一聯あり云ふ、「晚潮小竇に通じ、夜雨高枝に霽る、」霞沼節を撃つて嘆賞して曰、「今世只此一聯あり、詩を論ずる毎に、必舉げて以て人に示す、曩日君言ふ所、明月高涼の夜、此一句石原と相敵すべし、霞沼起すべからず、此句を以て相聞するなし、恨むべきのみ、」

可恨已。

余在朝鮮與韓客數人會飲於艸梁項吳引儀、金泰敬李明叟在焉、一館生袖南山環翠園十律來示韓客衆共圍觀之、讀到鴈歸梅發一聯爲之靖然改客曰、日本亦有此一聯耶、明叟便起在東廂上往來數遍朗吟不已、引儀曰、明叟來、卿知此詩意乎、明叟曰、音調高、所以朗吟也、引儀笑曰、遠卿實錄話此非卿所能知也、泰敬曰、此一聯妙則妙矣、惟暗字似乎婦人語、引儀曰、卿欲何字代之、泰敬曰、卻字如何、引儀曰、若用卻字、非詩也、泰敬閉目半晌曰、我誤矣、以上三則、共係芳洲口授、

朝鮮李德懋清脾錄云、余嘗遊平壤、舍球門吳生家有蘭亭集、日本詩人也、其明妃曲曰、

余朝鮮に在り、韓客數人と、艸梁項に會飲す、吳引儀、金泰敬、李明叟在り、一館生、南山環翠園の十律を袖にし來りて韓客に示す、衆共に圍んで之れを觀る、讀んで、鴈歸り梅發くの聯一に到りて、之れが爲めに靖然として容を改めて曰、日本にも亦此一聯あるかと、明叟便ち起つて東廂の上になり、往來數遍朗吟已ます、引儀曰、明叟來れ、卿此詩意を知るか、明叟曰、音調高し、朗吟する所以なり、引儀笑て曰、遠卿實錄話此れ卿の能く知る所に非ざるなり、泰敬曰、此一聯妙は則妙なり、惟、暗の字婦人の語に似たりと、引儀曰、卿何の字之れに代えんと欲す、泰敬曰、卻の字は如何、引儀曰、若し卻の字を用ふれば詩に非ざるなりと、泰敬目を閉づること半晌、曰、我誤れりと。以上三則共は芳洲の口授に係る、

朝鮮の李德懋の清脾錄に云ふ、余嘗て平壤に遊び、球門吳生の家へ舍す、蘭亭集あり、日本の詩人なり、其明妃の曲

合離亦奇才、軸後列書、越後片孝秩、平安那
波孝敬、平安合離王、浪華福承明、浪華出原

案、原注與、公、翼浪華葛子琴、淡海僧太真、伊勢

僧藥樹原注案、或是、主人浪華木世肅、今只

存葛張詩、曰、千秋會友有文章、花園藥欄舊

草堂、墟酒應同司馬、賣架書不讓鄴侯藏、微

雲淡處鷗千點、疎雨來時鴈數行、湖海湖游

人幾在、薰葭隔浦、欹帆檣、觀此二節、則韓人

之神、伏於本邦、可謂至矣、如高蘭亭、葛子琴、

易易耳、若使一見、當今諸英髦、又應歎息絕

倒、只憾文雅風流、無木世肅耳。

清脾錄、又曰、柳惠風巾、衍外集、載蜻蛉國詩

選原注、日本地形似蜻原注、其詩、高者摸擬三唐、下

者翺翺王李、一洗侏儒之音、有足多者原注、柳序

此に止る、余又若干首を抄載す、岡田直生字は

堂、墟酒應に同じかるべし、司馬の賣、架書讓らず、鄴侯の
藏、微雲淡なる處、鷗千點、疎雨來る時、雁數行、湖海湖遊人
幾か、在る、薰葭浦を隔て、帆檣、欹つ、此二節を觀れば、則
韓人の本邦に神伏する、至れりと謂ふべし、高蘭亭、葛子
琴の如きは、易々たるのみ、若し當今の諸英髦を一見せし
めば、又應に歎息、絶倒すべし、只憾む、文雅風流、木世肅な
きのみ。

清脾錄に、又曰、柳惠風巾、衍外集に、蜻蛉國詩選を載す、日本
原注の地形は蜻蛉に似た、其詩高き者は、三唐を摸擬し、下
り故に自ら蜻蛉國と稱す、其詩高き者は、三唐を摸擬し、下
き者は、王李に翺翺す、侏儒の音を、一洗す、多とするに足
る者あり、原注、柳序、此に止る、余又若干首を抄載す、岡田直生字は

此、余又抄載若干首、岡田宜生字挺之、號新川、玄川將、同本國、賦詩寓別、云、花袍纏帶擁驂騑、國士如君世所稀、入界時窺紅日出、望鄉惟見白雲飛、客舟經蘆遙衝雪、驛館逢春始換衣、此去江城看不遠、東風正好踏芳菲、富野義允字仲達、晚過興津、漁家鹽井傍青山、風定波平望亦閑、清見寺前田子浦、兩三舟趁暮鐘還、艸安世號大麓、懷玄川先生、春暮天涯思萬重、烏啼花謝寂孤峯、愁心一夜寄明月、高照關門澹墨松、原注、案自注赤馬關有澹墨松、德宇字見龍、奉送玄川元公歸國、云、玉節重來問虎溪、籠頭烟樹欲烏栖、春風不肯留驛客、無限潮音送馬蹄、那波師曾、字孝卿、號魯堂、早行云、溪頭布穀曉呼晴、蘋葉蘆花綠復生、

俳諧詩話附錄

挺之新川と號す、玄川將に本國に回らんとす詩を賦し別を寓す、云ふ、花袍纏帶驂騑を擁す、國士君の如きは世の稀なる所界に入る時紅日の出るを窺ひ、郷を望んで惟見る白雲の飛ぶを、客舟蘆を經て遙に雪を衝き、驛館春に逢ふて始めて衣を換ふ、此を去りて江城看すくるに遠からず、東風正に好し芳菲を踏むに、富野義允字は仲達、晚に興津を過ぐ、漁家鹽井青山に傍ふ、風定まり波平に望みも亦閑、清見寺前の田子の浦、兩三舟は暮鐘を趁ふて還る、艸安世大麓と號す、玄川先生を懷ふ、春暮れて天涯思ひ萬重、烏啼き花謝して孤峯寂たり、愁心一夜明月に寄す、高く照す關門澹墨の松、原注、按ずるに自注赤馬關に澹墨松あり、德宇字は見龍、玄川元公か國に歸るを奉送す、云、玉節重ねて來り虎溪を問ふ、籠頭の烟樹烏栖まんと欲す、春風背て驛客を留めず、無限の潮音馬蹄を送る、那波師曾、字は孝卿、魯堂と號す、早行云、溪頭の布穀曉晴を呼ぶ、蘋葉蘆花綠復生ず、更に層疊雲の隠見するあり、詩を諷ぬる人は畫中に在りて行く、岡田維周、字は仲玉、大整と號す、宜生の弟、自注、按ずるに、維玄川先生朝鮮に歸るを奉送す、云ふ、使を奉じ來りて好を修す、江山萬里餘、斷馬の感を催し易し、得難し換鶯の書、祖帳桃花落ち、歸程

更有層巒雲隱見、尋詩人在畫中行、岡田維周、字仲壬、號大壑、宜生之弟、自注、案、維周、時年十四、奉送玄川先生歸朝鮮云、奉使來修好、江山萬里餘、易催嘶馬感、難得換鷺書、祖帳桃花落、歸程柳葉舒、白雲隨處在、凝望意何如、雖不足、際於觀光之使、受賞於異邦、不可不錄。

孔雀樓筆記云、予伯氏江村君錫、藏蛻富先生自書月詩、有細竹馴老臥、喬林羈鳥驚之句、後蛻富集板行、改喬林作喬柯、意義共勝、可見七十老翁潛心藝文、不苟一字。

又云、梁蛻富、風景山二先生、譽望高于世、不待予言、二先生自有絕萬人之德、無滯非、無遂己、無妬排勝己之人、無阿富貴、雖後生末輩之詩文、潛心讀之、必兩三過、此等固雖儒

柳葉舒、白雲隨處在、凝望意何如、觀光の使に際すに足らずと雖、賞を異邦に受く、錄せざるべからず。

孔雀樓筆記に云ふ、予が伯氏江村君錫、蛻富先生自書の月の詩を藏す、細竹馴老臥し、喬林羈鳥驚く、の句あり、後蛻富集板行す、喬林を改めて喬柯に作る、意義共に勝る、見るべし、七十老翁藝文に潛心し、一字を苟もせざるを。

又云ふ、梁蛻富、風景山の二先生、譽望世に高し、予が言を待たず、二先生自ら萬人に絶するの徳あり、非を滯するなく、己を遂ぐるなく、己に勝るの人を妬排するなく、富貴に阿るなし、後生末輩の詩文と雖、潛心之れを讀む、必兩三過、此等固より儒者分上の事と雖、能く之れを行ふ

者分上之事、能行之者甚少矣、惟此二條固
不足盡二先生、亦可見其德量。

徂徠先生以英邁之資、敖睨一世、其詩有拙
有俗、蓋泰山不讓土壤也、至得意之作、南郭
諸子、不能闡藩籬、前卷已收許多篇、今復抄
錄數詩、小佛嶺云、鬱翠北來連函關、一條峻
嶺限東寰、下時更問嶺西路、九十六盤還自
艱、塞上曲云、風吹貂帽雪毳毳、胡馬千群大
漠南、喇叭齊聲中夜起、將軍營裡宴方酣、次
韻大潮上人春日見寄、少年意氣賦三都、回
首春雲渺太虛、何似啜茶脩竹裏、聽君朗誦
竺乾書、春宮怨云、鸞鏡朝朝泣粉華、怪來六
院忽喧嘩、笑他十歲新天子、解道阿嬌美似
花、可謂絕唱。

者は甚少なし、惟此二條、固より二先生を盡すに足らず、
亦其德量を見る可し。

徂徠先生英邁の資を以て一世を敖睨す、其詩拙あり俗あ
り、蓋泰山は土壤を讓らざるなり、得意の作に至りては、
南郭諸子、藩籬に闡する能はず、前卷已に許多の篇を收
む、今復數詩を抄録す、小佛嶺に云ふ、鬱翠北より來りて
函關に連なる、一條の峻嶺東寰を限る、下時更に問ふ嶺
西の路、九十六盤還て自ら艱む、塞上の曲に云ふ、風は貂
帽を吹て雪毳々、胡馬千群大漠の南、喇叭聲を齊ふして
中夜に起る、將軍營裡宴方に酣なり、大潮上人の春日寄
せらるゝに次韻す、少年意氣三都を賦す、首を回せば春
雲太虛に渺たり、何ぞ似ん茶を脩竹の裏に啜り、君が竺
乾の書を朗誦するを聽くに、春宮怨に云ふ、鸞鏡朝々
粉華に泣く、怪む六院忽ち喧嘩、笑ふ他の十歳の新天子、
解道す阿嬌の花よりも美なるを、と絶唱と謂ふべし。

山縣孝孺、以學德稱、爲物門翹楚、其詩亦高古閑澹、南郭以下、金華以上、彙抄其詩、今又錄出、呈朝鮮洪鏡湖云、烈士平生意氣高、方臨危險見英豪、海濤八月如山岳、傳命東來擁節旄、正德元年、祇役赤馬關、感秋風起、愀然作弔古八首云、詔旨空傳西土兵、羽林將校悉諸平、鸞輿玉輦無消息、滄海茫茫風雨聲、擬早發白帝城云、白帝城頭曉霧開、江陵歸客片帆回、曲頭欲問黃牛峽、已見章華古郢臺、宛然唐賢之作。

被褐長門人、工碁及詩、年六七十、寓于幽筠堂、雪江先生齒豁頭禿、孜孜著書、以爲樂、著有老子妄言、其他諸書、余垂髫時見之、送別云、離歌一何短、別恨一何長、不是離歌短、偏因

山縣孝孺、學德を以て稱せらる、物門の翹楚たり、其詩亦高古閑澹、南郭以下、金華以上、彙に其詩を抄す、今又錄出す、朝鮮の洪鏡湖に呈す、云ふ、烈士平生意氣高し、方に危險に臨んで英豪を見る、海濤八月山岳の如し、傳命東より來りて節旄を擁す、正德元年赤馬關に祇役す、秋風の起るに感じて愀然弔古八首を作る、云ふ、詔旨空しく傳ふ西土の兵、羽林將校諸平を悉す、鸞輿玉輦消息なし、滄海茫茫風雨の聲、早に白帝城を發するに擬す、云ふ、白帝城頭曉霧開く、江陵の歸客片帆廻る、曲頭はんと欲す、黃牛峽、已に見る章華の古郢臺、宛然唐賢の作。

被褐は長門の人碁及び詩に工なり、年六七十、幽筠堂に寓す、雪江先生の堂名、齒豁頭禿、孜孜、書を著して以て樂と爲す、著に老子妄言、其他諸書あり、余垂髫の時之を見る、別を送るに云ふ、離歌一に何ぞ短なる、別恨一に何ぞ長き、是れ離歌の短なるにあらず、偏に別恨の長きに因る、後去

別恨長、後去客南總、不知所終、山根泰徳長門人、南溟集、有贈被褐道人詩云、栖遲雖已老、著述見維新、煎茶養素裡、賞菊談玄前、皆記實錄也。

伊藤宗恕士峯、高入青冥、雲始收、諸峯羅列不能、儔孤根、豈止蟠三國、氣壓扶桑六十州、人或以為豪語、余云、不是豪語、麗語而已、若夫豪語、室鳩巢云、徐福尋仙海上浮、滄波何處問瀛洲、紫烟遙認富山雲、蟻附東西六十州。

木靖恭驢馬行云、服重致、遠力常足、契象應更智自精、又云、常山相公最樂善、求利世用久經營、適從鷄林致此種、由是觀之、應水府義公之召、舶來者歟、人見友元亦有此作、說

りて南總に客たり、終る所を知らず、山根泰徳長門の人、の南溟集に、被褐道人に贈る詩あり云、栖遲已に老ゆと雖、著述維れ新なるを見る茶を煎す養素の裡、菊を賞す談立の前、皆實錄を記するなり。

伊藤宗恕の士峯に「高く青冥に入りて雲初めて收まり、諸峯羅列して儔する能はず、孤根豈止、三國に蟠るのみならずや、氣は壓す扶桑の六十州」と人或は以て豪語と爲す、余云ふ、是れ豪語ならず、麗語のみ、夫の豪語の若きは、室鳩巢云ふ、徐福仙を尋ねて海上に浮び、滄波何れの處にか瀛洲を問はん、紫烟遙に認む富山の雲、蟻附す東西の六十州。

木靖恭の驢馬行に云ふ重を服し遠に致して力常に足る、に契し象更に應じ智自ら精なり、又云ふ、常山相公最善を樂しむ、世間を利せんと求めて久しく經營、適、鷄林より此種を致す、是れに由りて之れを觀れば水府義公の召に應じ舶來する者か、人見友元も亦此作あり、應更

應更之事然則鷄吹角雁打更之類可謂有異能矣。

秋玉山題新羅三郎吹笙足柄山圖云漢室將軍賦遠征虬鬚颯爽夜吹笙鐵衣忽見秋風起月白關山草木鳴近日京師人與野小山亦有此詩云千里關心奧地兵棄官赴援鶴領情身猶不惜況笙曲吹盡鳳音和月清二詩看官以爲如何

赤穂文學赤松鴻奇士也感懷云多病玉門客折腰見兒曹矯首望堂上痒極不得搔又云老大誠可悲四十又加五猶餘寸心在恥與噲等伍七言吾公在國每至歲杪班賜侍臣寒衣今年恩賜不及巨鴻戲賦一絕歲暮寒光徹老身舊袍弊盡不裁新請看恩遇還

の事を説く然らば則鷄角を吹き雁更を打つの類異能ありと謂ふべし。

秋玉山新羅三郎笙を足柄山に吹く圖に題して云ふ漢室將軍遠征賦し虬鬚颯爽夜吹笙を吹く鐵衣忽見秋風の起るを月は白し關山草木鳴る近日京師の人與野小山亦此詩あり云ふ千里心に關す奧地の兵官を棄てて援に赴く鶴領の情身猶惜ます況や笙曲をや鳳音を吹き盡して月清に和す二詩看官以て如何と感す。

赤穂文學赤松鴻は奇士なり感懷に云ふ多病玉門の客折腰兒曹を見る首を矯めて堂上を望み痒極まりて搔くを得ず又云ふ老大誠に悲しむべし四十又五を加ふ猶寸心を餘して在り恥らくは噲等と伍するを七言吾公國に在り歲杪に至る毎に侍臣に寒衣を班賜す今年恩賜巨鴻に及ばず戲に一絶を賦す歲暮寒光老身に徹し舊袍弊盡して新を裁せず請ふ看よ恩遇還て薄きなし自ら似たり梁園雪裡の人以て其人と爲りを見る

無濟、自似梁園雪裡人、可以見其爲人也、著

有靜思亭集。

源榜亭學識優博、其唱宋詩於京師、蓋爲嗜
矢皇都名勝詩集中載其菟道宋茶歌、頗有
石湖放翁之風味、大抵安永天明詩人、腹中
無墨、最乏詩資、以故篇篇塵腐、讀之唯恐臥
而已、六如有見於此、貯詩資爲丘山、竟鳴于
世、由是一變、至今日無復以唐詩爲藍本、嗚
呼亦甚矣、今以榜亭詩附于此、千畝綠雲萬
戶侯、一春裁得十春收、誰識田家新月令、秧
針初出是茶秋、
右附錄十數則、是不係少作、近日所漫著也、
今爲一卷附于此。

べし、著に靜思亭集あり。

源榜亭學識優博、其宋詩を京師に唱ふるは蓋、種矢と爲
す、皇都名勝詩集中に其菟道宋茶歌を載す、頗、石湖放翁
の風味あり、大抵安永天明の詩人、腹中墨なし、最詩資に
乏し、故を以て篇々塵腐、之れを讀んで唯臥せんを恐る
ゝのみ、六如此に見るあり、詩資を貯へて丘山を爲す、竟
に世に鳴る、是れに由りて一變す、今日に至りて復唐詩
を以て藍本と爲すなし、嗚呼、亦甚し、今榜亭の詩を以て
此に附す、千畝の綠雲萬戶侯、一春裁得十春に收む、
誰か識らん田家の新月令、秧針初めて出づるときは是れ
茶秋。

右附錄十數則、是れ少作に係らず、近日漫著する所なり
今一卷と爲し此に附す。

弊帚詩話附錄

終

跋

余幼學詩、好讀近人詩、(近作邦詩)遂有所論著、(遂、作)哀輯、作編、名曰弊

帚詩話、(敵、作)實、在廿歲左右也、(廿、作)己酉、春初、宿疾頓發、兩脚擁

腫、舟而行、輿而步、厭其不便于事、謝客在家、偶探敗籠、獲此編、少年

進取、妄議、先達、似無忌憚、(己酉、春初以下、作乙酉、編、按、閱一過、撫、卷、笑曰、少作、古人戒之、)

猶且、不棄者、亦吾家之弊帚爾、嘉永己酉夏五、西

島長孫識、(無嘉永己酉夏五、四、島、八、字、)

跋